

# 大 谷 田 淵 遺 跡

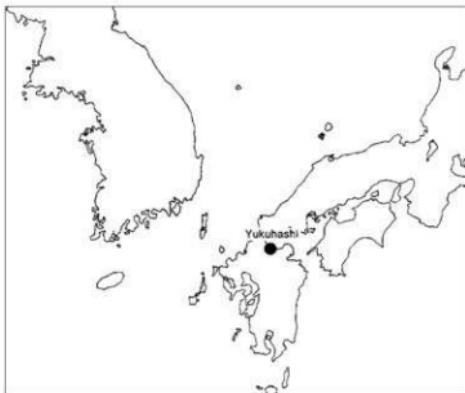
福岡県行橋市大字大谷所在遺跡の調査

2010

行橋市教育委員会

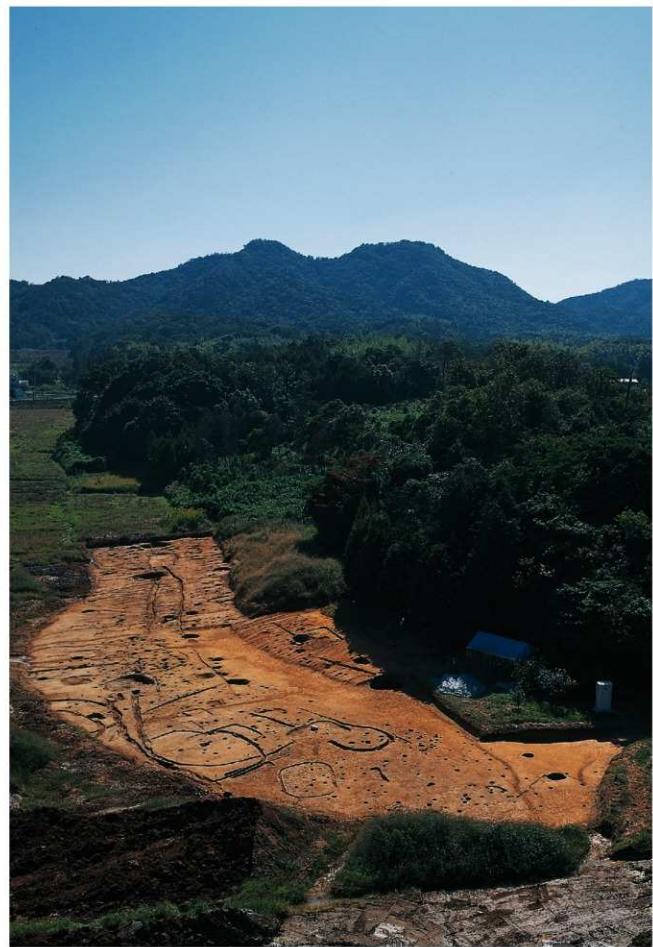
# 大 谷 田 淵 遺 跡

福岡県行橋市大字大谷所在遺跡の調査



2010

行橋市教育委員会



馬ヶ岳城（後方）と大谷田園遺跡



1. 積穴建物跡出土双魚文青磁碗



2. 2号井戸跡出土下駄

## 序

本書は平成7年度に実施いたしました大谷田淵遺跡の発掘調査の報告書であります。

大谷田淵遺跡は大谷天生田地区の県営農業基盤整備事業にともない国、県の補助を受け、行橋市教育委員会が遺跡の記録保存を目的として実施いたしました。

調査では、弥生時代から室町時代にかけての遺構が確認され、特に鎌倉時代から室町時代の遺構、遺物については注目されるものが多く、当地の中世史を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本遺跡の調査に御協力いただきました地元のみなさまならびに、福岡県教育委員会をはじめ、調査にあたりご指導いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

本書が学術研究はもとより地域の文化財への理解と認識を深める一助として、広く活用されることを願います。

平成22年3月

行橋市教育委員会  
教育長 徳永 文悟

# 例　　言

1. 本書は、大谷天生田地区県営は場整備事業にともない、国、県の補助を受けて平成7年度に実施した 大谷田淵遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は行橋市教育委員会が主体となって行った。  
調査組織は第1章に記す。
3. 遺構の実測は小川秀樹、内野陽子、木下孝子、国永敏枝、坂本千恵子、塙内トシエ、中園満子、三井恭子が行った。
4. 遺構写真は小川が撮影し、空中写真撮影はフォト大塚が行った。
5. 遺構図の整理は主として奥野康代、三仙恵理子が行った。
6. 遺物の実測は山口裕平、奥野、三仙が行った。
7. 遺物の写真撮影は山口が行った。
8. 遺構、遺物図面の斉書は奥野と三仙が行い一部を（株）埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。
9. 本書に使用した方位は座標北である。
10. 本書に用いた遺構の略号は、SB（掘立柱建物跡）、SE（井戸跡）、SK（土坑）、SD（溝）、SP（小穴）である。
11. 本書で用いた輸入陶器の分類・年代観は以下の文献による。  
茶道資料館1990「遺跡出土の朝鮮王朝陶磁一名録と考古学－」  
太宰府市教育委員会2000「太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一」(太宰府市の文化財第49集)
12. 「遺物觀察表」の色調は以下の文献による。  
小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準上色帖』1995年版
13. 本書報告の遺物、図面、写真是行橋市教育委員会において保管している。
14. 本書の執筆分担は下記のとおりである。  
小川　第1章、第2章、第3章-1、第3章-2のうち遺構、第4章  
山口　第3章-2のうち遺物、(11) 遺物觀察表
15. 本書の編集は山口と協議し小川が行った。

# 本　　文　　目　　次

第1章 はじめに	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の記録	6
1. 遺跡の概要	6
2. 遺構と遺物	9
(1) 壊穴住居跡	9
(2) 掘立柱建物跡	12
(3) 壁穴建物跡	13
(4) 井 戸 跡	15
(5) 溝 跡	26
(6) 土 坑	36
(7) 地下式土壙	45
(8) ピ ッ ト	46
(9) 包含層出土遺物	46
(10) 表面採集遺物	49
(11) 遺物觀察表	53
第4章 おわりに	59
報告書抄録	

# 図 版 目 次

巻頭図版 1 馬ヶ岳城（後方）と大谷田淵遺跡

巻頭図版 2 1. 壑穴建物跡出土双魚文青磁杯  
2. 2号井戸跡出土下駄

図 版 1 大谷田淵遺跡周辺 米軍撮影空中写真

図 版 2 1. 遺跡遠景（東から）  
2. 遺跡全景（東上空から）

図 版 3 1. 遺跡北側  
2. 遺跡南側

図 版 4 1. 1号竪穴住居跡  
2. 2号竪穴住居跡  
3. 3号竪穴住居跡

図 版 5 1. 1号掘立柱建物跡  
2. 2号掘立柱建物跡  
3. 3号掘立柱建物跡

図 版 6 1. 竪穴建物跡（上空から）  
2. 竪穴建物跡遺物出土状況  
3. 竪穴建物跡（南から）

図 版 7 1. 竪穴建物跡出土状況  
2. 竪穴建物跡土器出土状況  
3. 竪穴建物跡双魚文青磁杯出土状況

図 版 8 1. 1号井戸跡  
2. 1号井戸跡五輪塔出土状況  
3. 1号井戸跡石臼出土状況

図 版 9 1. 2号井戸跡（西から）  
2. 2号井戸跡（南から）  
3. 2号井戸跡（北から）

図 版 10 1. 2号井戸跡井筒検出状況  
2. 2号井戸跡井筒検出状況  
3. 2号井戸跡下駄出土状況

図 版 11 1. 3号井戸跡  
2. 4号井戸跡  
3. 6号井戸跡

図 版 12 1. 6号井戸跡曲物出土状況  
2. 7号井戸跡

3. 8号井戸跡

図 版 13 1. 3号溝跡と4号溝跡  
2. 3号溝跡遺物出土状況  
3. 10号溝跡

図 版 14 1. 11号溝跡と19号土坑  
2. 12号溝跡遺物出土状況  
3. 4号土坑

図 版 15 1. 5号土坑  
2. 8号土坑  
3. 10号土坑

図 版 16 1. 11号・12号土坑  
2. 15号土坑  
3. 19号土坑

図 版 17 1. 20号土坑  
2. 22号土坑  
3. 23号土坑  
4. 地下式土壙

図 版 18 1. 青銅製勧先出土状況  
2. 遺溝検出状況  
3. 発掘調査風景

図 版 19 出土遺物（1）

図 版 20 出土遺物（2）

図 版 21 出土遺物（3）

図 版 22 出土遺物（4）

図 版 23 出土遺物（5）

図 版 24 出土遺物（6）

図 版 25 出土遺物（7）

図 版 26 出土遺物（8）

図 版 27 出土遺物（9）

図 版 28 出土遺物（10）

図 版 29 出土遺物（11）

図 版 30 出土遺物（12）

図 版 31 出土遺物（13）

図 版 32 出土遺物（14）

図 版 33 出土遺物（15）

## 挿 図 目 次

第1図	大谷田瀬遺跡の位置 (1/2,500,000).....	2
第2図	大谷田瀬遺跡の周辺遺跡分布図 (1/60,000).....	3
第3図	京都平野における莊園の分布 (註22文献より).....	4
第4図	遺跡の立地環境 (1/5,000).....	6
第5図	大谷田瀬遺跡構造配置図 (1/300).....	7
第6図	1号堅穴住居跡 (1/60).....	9
第7図	1・2号堅穴住居跡出土遺物 (1/3).....	9
第8図	2・3号堅穴住居跡 (1/60).....	10
第9図	1号掘立柱建物跡 (1/60).....	11
第10図	2号掘立柱建物跡 (1/60).....	12
第11図	3号掘立柱建物跡 (1/60).....	13
第12図	堅穴建物跡 (1/80).....	13
第13図	堅穴建物跡出土遺物 (1) (1/3).....	14
第14図	堅穴建物跡出土遺物 (2) (1/3).....	15
第15図	1号井戸跡 (1/40).....	16
第16図	1号井戸跡出土遺物 (1) (1/3).....	17
第17図	1号井戸跡出土遺物 (2) (1/3).....	18
第18図	1号井戸跡出土遺物 (3) (1/6).....	19
第19図	2号井戸跡 (1/40).....	20
第20図	2号井戸跡出土遺物 (1/1・1/3).....	21
第21図	3号井戸跡 (1/40).....	22
第22図	3号井戸跡出土遺物 (1/3).....	23
第23図	6号井戸跡出土遺物 (1/3).....	24
第24図	4～9号井戸跡 (1/40).....	25
第25図	1号・2号溝跡 (1/60).....	26
第26図	1号・2号溝跡出土遺物 (1/3).....	27
第27図	3号溝跡 (1/60).....	27
第28図	3号溝跡出土遺物 (1) (1/3).....	28
第29図	3号溝跡出土遺物 (2) (1/3).....	29
第30図	3号溝跡出土遺物 (3) (1/3).....	30
第31図	4号溝跡 (1/60).....	30
第32図	4号溝跡出土遺物 (1/3).....	31
第33図	10号溝跡 (1/60).....	32
第34図	10号溝跡出土遺物 (1/3).....	33
第35図	11号溝跡 (1/80).....	33

第36図	12号溝跡 (1/60).....	34
第37図	12号溝跡出土遺物 (1/3).....	35
第38図	1号・2号・3号土坑 (1/40).....	36
第39図	4号土坑 (1/40).....	37
第40図	4号土坑出土遺物 (1/3).....	37
第41図	5号土坑 (1/40).....	37
第42図	5号土坑出土遺物 (1/3).....	37
第43図	6号土坑 (1/40).....	38
第44図	6号土坑出土遺物 (1/3).....	38
第45図	7号土坑 (1/40).....	38
第46図	7号土坑出土遺物 (1/3).....	38
第47図	8号土坑 (1/40).....	38
第48図	9号・10号・11号土坑 (1/40).....	39
第49図	11号土坑出土遺物 (1/3).....	39
第50図	12号・13号・14号土坑 (1/40).....	40
第51図	15号土坑 (1/60).....	40
第52図	15号土坑出土遺物 (1/3).....	41
第53図	16号・17号土坑 (1/40).....	41
第54図	17号土坑出土遺物 (1/3).....	42
第55図	18号土坑 (1/40).....	42
第56図	18号土坑出土遺物 (1/3).....	42
第57図	19号土坑 (1/60).....	42
第58図	19号土坑出土遺物 (1/3).....	43
第59図	20号土坑 (1/40).....	43
第60図	21号土坑 (1/40).....	44
第61図	21号土坑出土遺物 (1/3).....	44
第62図	22号・23号土坑 (1/40).....	44
第63図	24号土坑 (1/40).....	45
第64図	24号土坑出土遺物 (1/3).....	45
第65図	地下式土壙 (1/50).....	45
第66図	ピット出土遺物 (1/3).....	46
第67図	包含層出土遺物 (1) (1/3).....	47
第68図	包含層出土遺物 (2) (1/3).....	48
第69図	表面採集遺物 (1) (1/3).....	50
第70図	表面採集遺物 (2) (1/3).....	51
第71図	表面採集遺物 (3) (1/1・1/3).....	52

## 表 目 次

第1表 大谷田淵遺跡出土遺物観察表 ..... 53

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

行橋市の大谷天生田地区では平成5年から12年にかけて工事面積98haにわたる県営は場整備事業が実施された。大谷田淵遺跡はこの工事に先立つ埋蔵文化財の確認調査で発見された遺跡である。市教育委員会と福岡県農林事務所はこの遺跡の調査と保存について協議し、その結果、工事で削平が予想される部分を対象に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成7年5月25日から10月14日まで3,000m<sup>2</sup>を対象に実施した。

## 2. 調査体制

調査関係者は下記のとおりである。

### 現地調査（平成7年度）

総括	行橋市教育委員会 教育長	白石 淳
	教育次長	加来 博
	社会教育課長	水岡 正治
	社会教育課 文化係長	西江 文敏
調査	社会教育課	小川 秀樹（調査担当）
庶務	社会教育課	西村 有二

### 発掘調査作業員

上田 好子 内野 陽子 長田ミサヲ 片桐 公尾 木下 孝子 楠本ハママ  
国永 敏枝 佐々木厚子 末松 静子 田中 一 田中ハナコ 西 敬子  
平田 良枝 松本 恒子 道出喜世一 宮下美佐子 森脇世津子 吉兼美智子  
吉武美智子

### 報告書作成（平成21年度）

総括	行橋市教育委員会 教育長	徳永 文悟
	教育部長	尾畠 和敏
	教育部 文化課長	酒井 和宣
調査	教育部 文化課 文化財保護係長	小川 秀樹（報告書担当）
	教育部 文化課 文化財保護係	伊藤 昌広
	教育部 文化課 文化財保護係	中原 博
	教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（報告書担当）
庶務	教育部 文化課 文化振興係長	辛嶋 智恵子
	教育部 文化課 文化振興係	北田 千穂子
整理作業	奥野 康代 三仙 恵理子 橋田 孝子 佐々木 豊子	

## 第2章 位置と環境

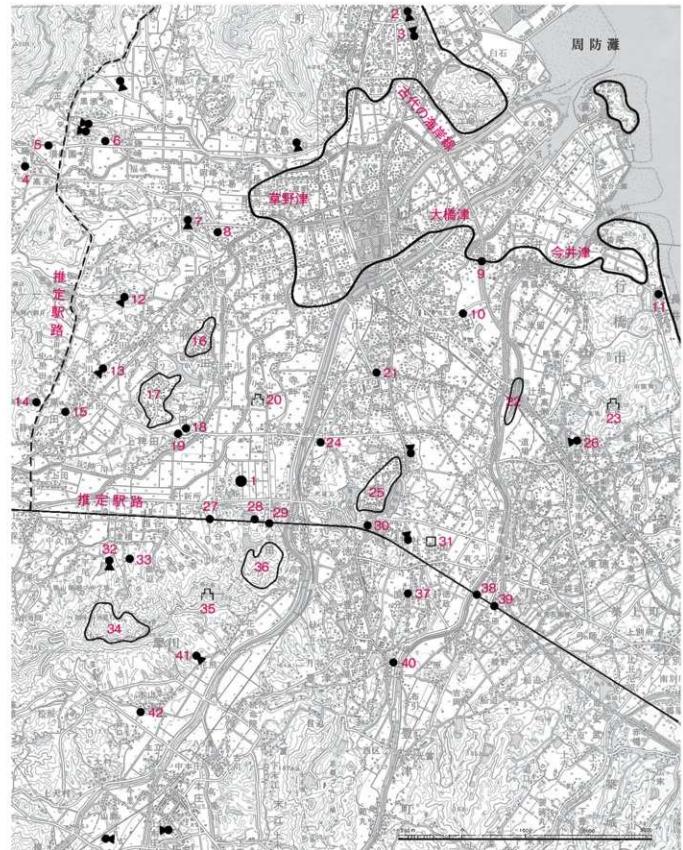
大谷田瀬遺跡は福岡県行橋市大谷字田瀬で確認された遺跡である。江戸時代以前は豊前国京都郡大谷村に属したが、本遺跡は仲津郡天生田村との境界線上にあたることから郡境の移動で仲津郡に帰属した時期があった可能性もある。

行橋市は福岡県の北東部に位置する。市域は三方を山に囲まれ東に周防灘に面した行橋平野あるいは京都平野とよばれる臨海平野の中央部を占める。大谷田瀬遺跡はこの平野の南方に位置する馬ヶ岳から北へ派生する丘陵の先端根部に位置する。

この平野に形成時代から農耕集落が成長する過程は、周防灘に面した前期の長井遺跡<sup>(1)</sup>や辻垣遺跡群<sup>(2)</sup>、これに続く大規模集落である下稗田遺跡<sup>(3)</sup>などに認めることができる。古墳時代になると畿内と九州との接点として地理的重要性が増し、豊前地域の中心的勢力がこの地に出現し成長していった。3世紀末頃出現する全長130mの石塚山古墳<sup>(4)</sup>、5世紀中頃の全長118mの御所山古墳<sup>(5)</sup>、以後継続的に築造される八雷古墳<sup>(6)</sup>、庄屋塚古墳、扇八幡古墳などの前方後円墳、橘塚古墳、綾塚古墳、甲坂方墳<sup>(7)</sup>などの大型首長墓群がそれを物語っている。古墳の造営が終息を迎える7世紀末から8世紀前半ころ京都郡に椿市庵寺<sup>(8)</sup>、仲津郡に上坂庵寺、木山庵寺<sup>(9)</sup>が創建され仏教文化も移植された。この地の地理的重要性は律令期にも継承され、その形成過程で对外防衛の山城として御所ヶ谷神龍石<sup>(10)</sup>が築かれた。さらに縱横に駅路が整備され豊前国府<sup>(11)</sup>や国分寺<sup>(12)</sup>も設置されるに至った。また平野を潤す周防灘に注ぐ長崎川、今川、祓川の河口部に形成された入江には草屋津、大橋津、今井津など畿内と九州を結ぶ瀬戸内航路の要港が、時代とともに場



第1図 大谷田瀬遺跡の位置 (1/250,000)



1. 大谷田瀬遺跡 2. 番塚古墳 3. 御所山古墳 4. 高来正丸遺跡 5. 椿市庵寺 6. 德永法師ヶ坪遺跡  
7. ピワノクマ古墳 8. 延永ヤ日ミ園道路 9. 金屋道 10. 羽根木古屋敷道路 11. 長井道路 12. 八雷古墳  
13. 庄屋塚古墳 14. 綾塚古墳 15. 扇八幡古墳 16. 前山遺跡 17. 下稗田道路 18. 下神田森遺跡  
19. 下稗田台ノ下道路 20. 宝山城跡 21. 福富小畠遺跡 22. 辻垣遺跡 23. 喜山城跡 24. 欠留堂ノ前道路  
25. 竹並遺跡 26. 半人塚古墳 27. 大谷車塚遺跡 28. 天生田矢久遺跡 29. 天生田大池遺跡 30. 甲坂方墳  
31. 豊前国府路 32. 片峰1号墳 33. 内原敷遺跡 34. 御所ヶ谷神龍石 35. 馬ヶ岳城 36. 大若隣道路群  
37. 豊前国分寺路 38. 菅見櫛ノ口道路 39. カワラケ田道路 40. 上坂庵寺 41. 雄神古墳 42. 木山庵寺

第2図 大谷田瀬遺跡の周辺遺跡分布図 (1/60,000)

所を移しながら存在し続けた。豊前国における京都平野の地理的、経済的優位性はこれらの港を利用した水上交通と陸上交通によって支えられ、小倉と中津に城下町が形成される近世まで維持された。

京都平野の様相を概観したが、つぎに大谷田瀬遺跡の周辺に焦点をあててみよう。弥生時代については本遺跡の近くで特に目を引く遺跡は確認されていないが井尻川、長崎川をはさんで2キロほど離れた丘陵には、前期後葉の板付II式期から大規模化し、後期まで続く行橋平野の拠点集落である下伊丹遺跡が営まれ、その分村である前田山遺跡<sup>[13]</sup>なども展開する。また本遺跡に程近い馬ヶ岳や天生田大将陣出土と伝承される広形銅鏡や広形銅戈の存在も注意される<sup>[14]</sup>。古墳時代は本遺跡の南東に位置する天生田丘陵遺跡<sup>[15]</sup>に後期の住居跡6軒が認められるものの周辺地域の集落の実態はまだ十分把握されていない。ただ今川西岸の天生田大将陣地区の丘陵には数百基にも及ぶ横穴墓や群集墳が分布することから、これらの被葬者が営んだ大規模な集落がこの周辺に存在したと考えられる。また大将陣出土と伝えられる日本最大の金銅製鏡が東京国立博物館に所蔵されている<sup>[16]</sup>。律令期には本遺跡の600メートル南側を駿路が東西一直線に貫き、その痕跡は今も周辺の丘陵に切通しとして姿を留めている。またこのルート上の大谷車塙遺跡<sup>[17]</sup>や天生田大池遺跡<sup>[18]</sup>などの発掘調査では道路の跡が検出されている。さらにこの駿路と方位を揃えて周辺の平野部一帯には広範囲に里木水田が展開していた。(図版1)

次に本遺跡周辺の中世遺跡を概観する。天生田矢丘遺跡からは土壙墓、井戸、溝などの遺構が検出されている。下稗田台ノ下遺跡<sup>(19)</sup>からは地下式土壙2基、土壙墓2基などが検出され、地下式土壙には一石五輪塔等がともなうことから墓の機能を有するものと推定される。下稗田森遺跡<sup>(20)</sup>では12世紀後半から13世紀初頭の土壙墓が確認されている。内屋敷遺跡<sup>(21)</sup>からは11世紀末から12世紀初頭の土壙墓が調査された。矢留堂の前遺跡は現在東九州自動車関係の発掘調査が進行中で、方形の周溝を巡らす屋敷数ヶが連なつた跡地で検出されている。

これら遺跡の出土遺物や墳墓の様相をみると武士階層の存在を想起させるが、突出した支配層の存在を裏付けるまでには至っていない。

律令制度の弛緩にともない10世紀末以来、京都平野において多くの莊園が成立する。平安期成立の莊園としては宇佐神宮領の津波莊、弥勒寺領の草野莊、大野井莊など宇佐宮関係のものが多い。大谷田淵遺跡との関係が考えられる莊園には中世に成立したと考えられる天生田莊がある<sup>(22)</sup>。(第3図)

大谷田淵遺跡より南に望む標高216mの馬ヶ岳には京都平野を代表



第3図 京都平野における莊園の分布（註22文献より）

する中世山城、馬ヶ岳城が築かれた。豊前北部の軍事の要であるこの城は室町時代以降、度々攻防の舞台となつた。天正15年（1587）豊臣秀吉の九州平定後、豊前六郡を与えられた黒田氏の居城となつたが間もなく大分県中津に拠点を移し、その後、黒田氏に替わり豊前に入都した細川氏もその拠点を小倉に置いたことから近世以降この地の拠点性は失われ城下小倉の穀倉地としての機能を果たすこととなつた。

三

- (1) 小田富二「福岡駅傍岸の弥生式土壙」(『九州考古学』11・12・1961)  
定村寛二・小田富二上「福岡駅長井跡の弥生式土壙」(『九州考古学』25・26・1965)

(2) 福岡県教育委員会「(延田)羽原町遺跡」(福岡田道遺跡埋蔵文化財調査報告 第1集 1993)  
福岡県教育委員会「(延田)長島遺跡」(福岡田道遺跡埋蔵文化財調査報告 第2集 1994)

(3) 行橋市教育委員会「下畔田遺跡」(行橋市文化財調査報告書 第1集 1985)

(4) 菊田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」(菊田町文化財調査報告書 第9集 1988)

(5) 菊田町教育委員会「史跡御山古墳管理計画策定報告書」(1976)  
豊津町教育委員会「豊前国における丸久西遺跡」(豊津町文化財調査報告書 第9集 1990)

(6) 行橋市教育委員会「八雷古原」(行橋市文化財調査報告書 第14集 1984)

(7) 豊津町教育委員会「甲塚方墳」(豊津町文化財調査報告書 第13集 1994)

(8) 行橋市教育委員会「柳市廃寺」(行橋市文化財調査報告書 第8集 1980)  
行橋市教育委員会「柳市廃寺」 II (行橋市文化財調査報告書 第24集 1996)

(9) 星川町教育委員会「木山廃寺跡」(1975)

(10) 行橋市教育委員会「史跡御ヶ谷神籠石」(行橋市文化財調査報告書 第26集 1998)

(11) 豊津町教育委員会「豊前国」(豊津町文化財調査報告書第3、4、5、8、10、11、12、13集 1985～93)  
(12) 豊津町教育委員会「史跡豊前国分寺跡」(豊津町文化財調査報告書第16集 1995)

(13) 行橋市教育委員会「前田山遺跡」(行橋市文化財調査報告書 第19集 1987)

(14) 東京考古学会「日本本銅器發見地名表」(考古学雑誌) 2～4

(15) 行橋市史編纂委員会「天生田矢穴遺跡」(行橋市史資料編原始・古代) (2006)

(16) 福岡市博物館所蔵の「豊前・筑紫其他出土考古古品圖」に記載

(17) 行橋市史編纂委員会「大谷原遺跡」(行橋市史資料編原始・古代) (2006)

(18) 福岡県教育委員会「天生田大池遺跡」(福岡田道文化財調査報告書 第137集 1999)

(19) 行橋市史編纂委員会「下畔田山ノ下遺跡」(行橋市史資料編原始・古代) (2006)

(20) 行橋市史編纂委員会「下畔田森遺跡」(行橋市史資料編原始・古代) (2006)

(21) 行橋市教育委員会「内屋敷遺跡」(行橋市文化財調査報告書 第26集 1998)

(22) 上井伊「平安時代中期の莊と園町」(「貯金臺」(京都平野)) (「行橋市史中査」) (2006)

## 第3章 調査の記録

### 1. 遺跡の概要

本遺跡は南に連なる馬ヶ岳の山並みから派生する標高26.1m丘陵の東側の裾部で確認された遺跡である。調査対象地は畑や水田として利用されていた。検出された遺構は丘陵の上部から流れ込んだ弥生時代から中世にかけての包含層に覆われていた。

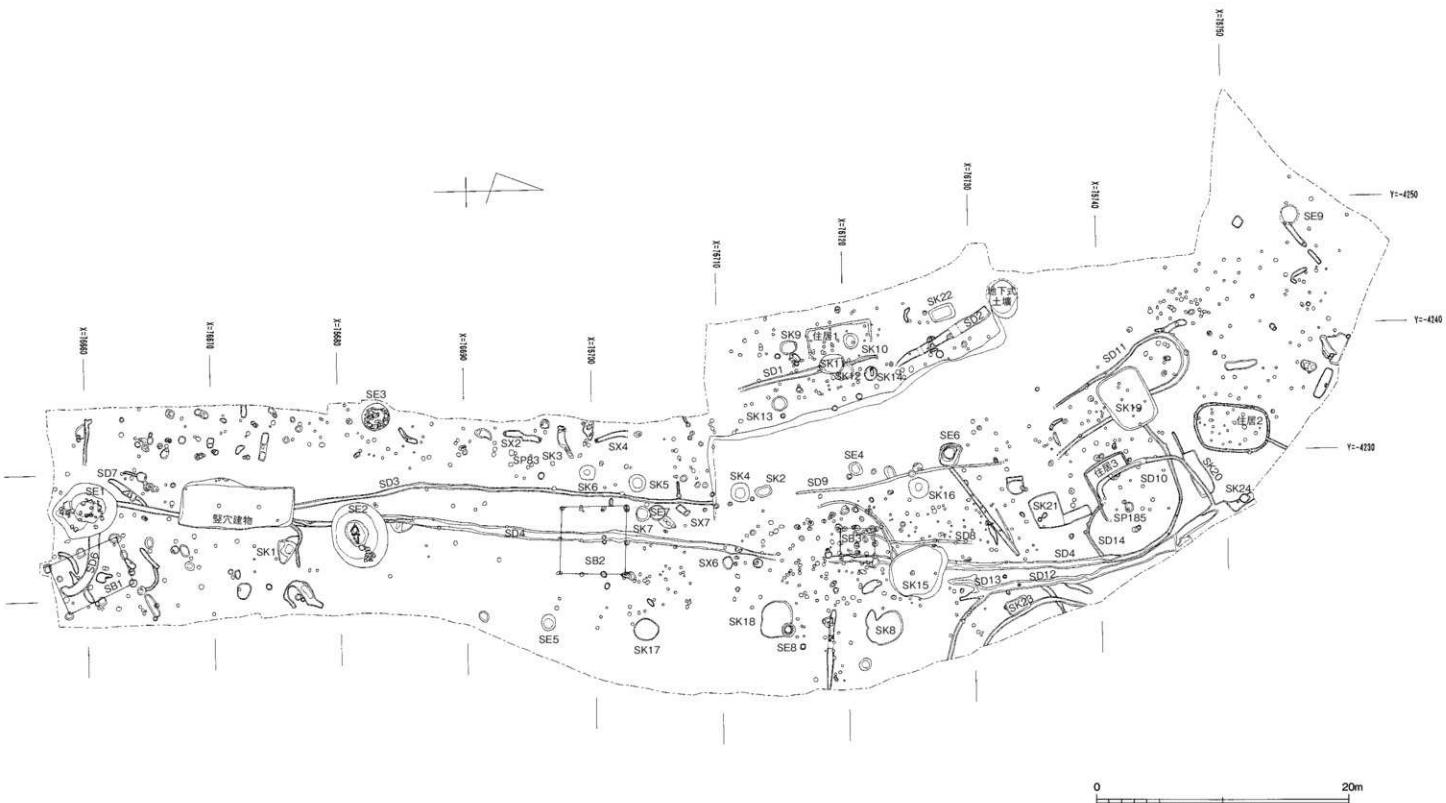
包含層に被覆されていたにもかかわらず遺構の残りは必ずしも良好とは言えず、特に弥生時代、古墳時代の遺構は中世以降の整地や開墾、耕作で削平を受けていた。

確認された主な遺構としては竪穴住居跡3軒、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟、井戸9基、溝跡14条、土坑24基、地下式土壙などがあり、弥生時代から室町時代まで断続的に営まれた遺跡であることがわかる。

弥生時代の竪穴住居跡と思われる遺構は1軒のみであるが遺跡の削平状況から円形に並ぶピット群が複数認められることからさらに数軒が存在した可能性がある。古墳時代の住居についても同様である。中世の遺構は井戸が多い。1軒確認された大型の竪穴建物からは硯や龍泉窓の双魚文坏などが出土し、中世期の遺構については一般集落とは異なる様相が認められた。



第4図 遺跡の立地環境 (1/5,000)

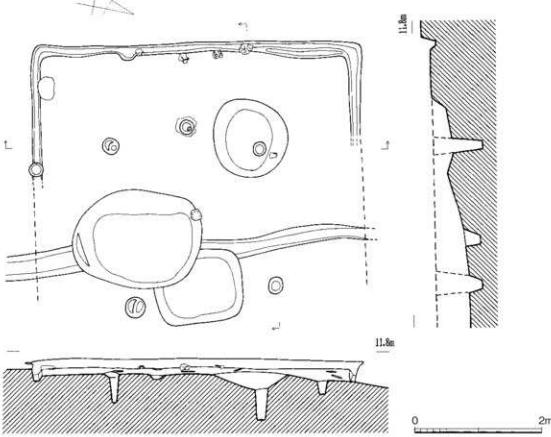


第5図 大谷田遺跡遺構配置図 (1/300)

## 2. 遺構と遺物

### (1) 壊穴住居跡

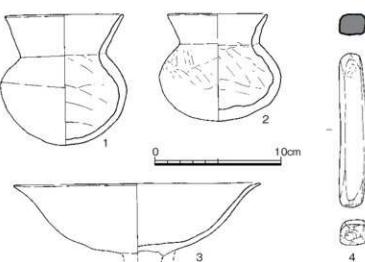
1号壊穴住居跡（第6図、図版4）



第6図 1号壊穴住居跡 (1/60)

調査区中央部西端付近に位置する方形の壊穴住居跡である。

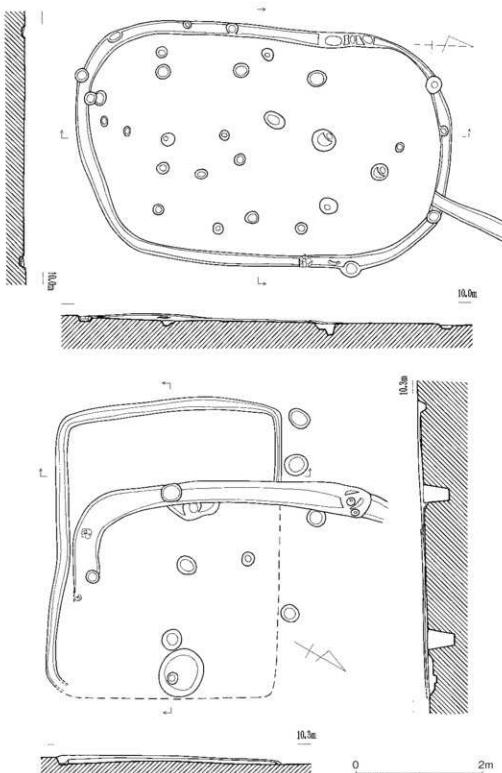
遺構上面はかなり削平を受け残りは悪い。壁面に沿って周溝を巡らすが南側二分の一は削平を受け壁も周溝もとどめない。南北5.2m、残存壁高は西側の残りの良い部分で15cm程度である。主柱穴は4本と考えられ柱穴の配置状況から本住居は正方形プランだと考えられる。



第7図 1・2号壊穴住居跡出土遺物 (1/3)

出土遺物（第7図、図版19）

古式土器器 1～2は小型丸底壺、いずれもほぼ完形で黒斑をもつ。内面はヘラ削り調整、2は外面にミガキ調整を施す。3の高杯は壺部の破片で摩滅が著しい。



第8図 2・3号竪穴住居跡 (1/60)

2号竪穴住居跡（第8図、図版4）

調査区北側に位置する。現況で幅20～25cm、深さ10cm程度の溝が楕円形に巡る造構である。規模は長径5.9m、短径3.8mである。造構上面は削平を受け壁面は残っておらず、また柱穴の配置状況も明確でないので造構の性格は判断しかねたが、ここでは竪穴住居跡として報告する。

下種田遺跡から同様な楕円形プランの弥生時代住居跡が確認されている。

出土遺物（第7図、図版19）

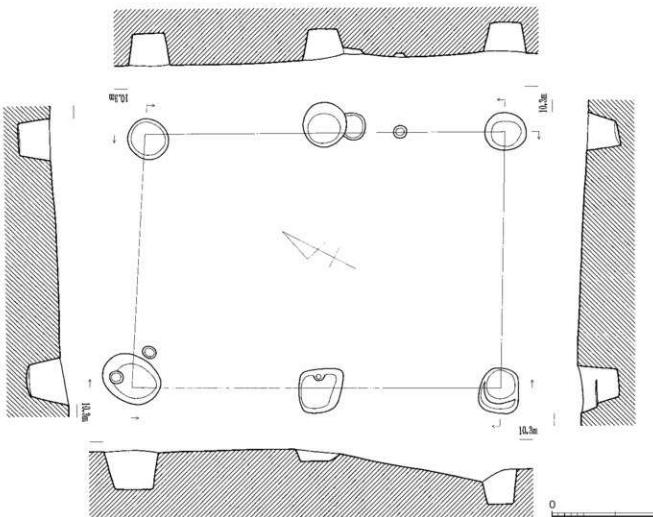
石器 4は砂岩製の砥石。棒状の形態をなす完品。

3号竪穴住居跡（第8図、図版4）

調査区の北側に位置する。

4.8m×3.6mの長方形プランの竪穴式住居である。上面はかなり削平を受け壁面は残存せず周溝も北側と西側で削平を受ける。周溝は残存状況で幅20cm、深さ12cm程度である。

長軸に沿って2本の主柱穴が並んで検出されている。



第9図 1号掘立柱建物跡 (1/60)

## (2) 挖立柱建物跡

### 1号掘立柱建物跡 (SB1) (第9図、図版5)

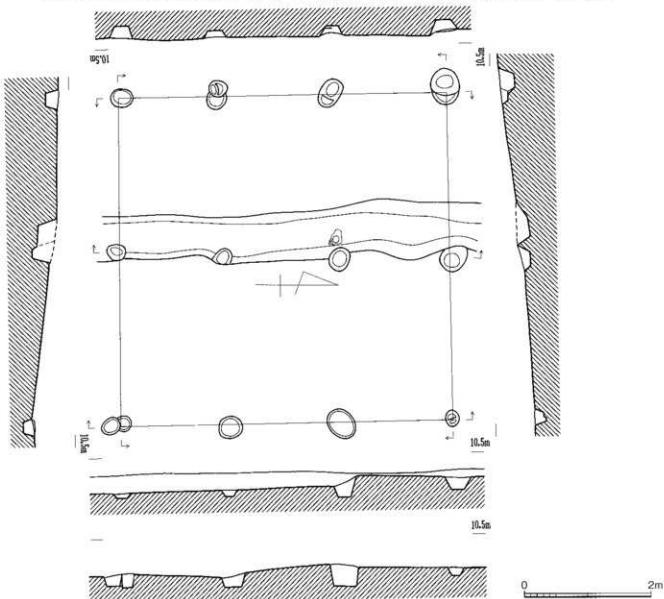
調査区の南東隅で検出した梁行1間(4.0m)×桁行2間(5.55m)の掘立柱建物跡である。掘方は円形と隅丸方形があり、主軸方位をN-21°-Eにとる。出土遺物なし。

### 2号掘立柱建物跡 (SB2) (第10図、図版5)

調査区の中央に位置する梁行2間(5.2m)×桁行3間(5.2m)の正方形プランの掘立柱建物跡でSD4を切る。主軸を真北に向ける南北棟の建物である。外側の柱間とほほ同じ3間の中央柱列を有す。出土遺物なし。

### 3号掘立柱建物跡 (SB3) (第11図、図版5)

調査区の中央に位置する梁行2間(3.0m)×桁行2間(2.1m)の小型の掘立柱建物跡でSD4を切



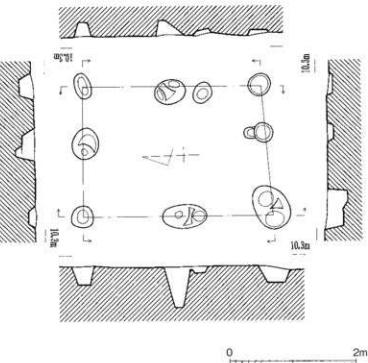
第10図 2号掘立柱建物跡 (1/60)

る。建物の規模が小さいことから1間×2間となる可能性もある。主軸方位はN-1°-Eで、ほぼ真北を向いた建物である。出土遺物なし。

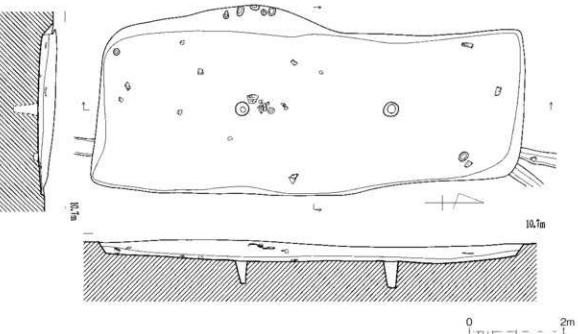
### (3) 堪穴建物跡 (第12図、図版6・7)

調査区の南側で検出した道構である。概ね9.0m×3.2mの長方形の平面プランで掘り込まれ、床面は中央に向かってわずかに傾斜するがほぼ平坦である。検出面から中央付近の床までの深さは約40cmである。建物は主軸を真北に向け、中軸線上に2本の柱穴が認められ、この2本の柱を主柱とした建物が想定される。柱穴は径30cm、深さ50～58cmである。

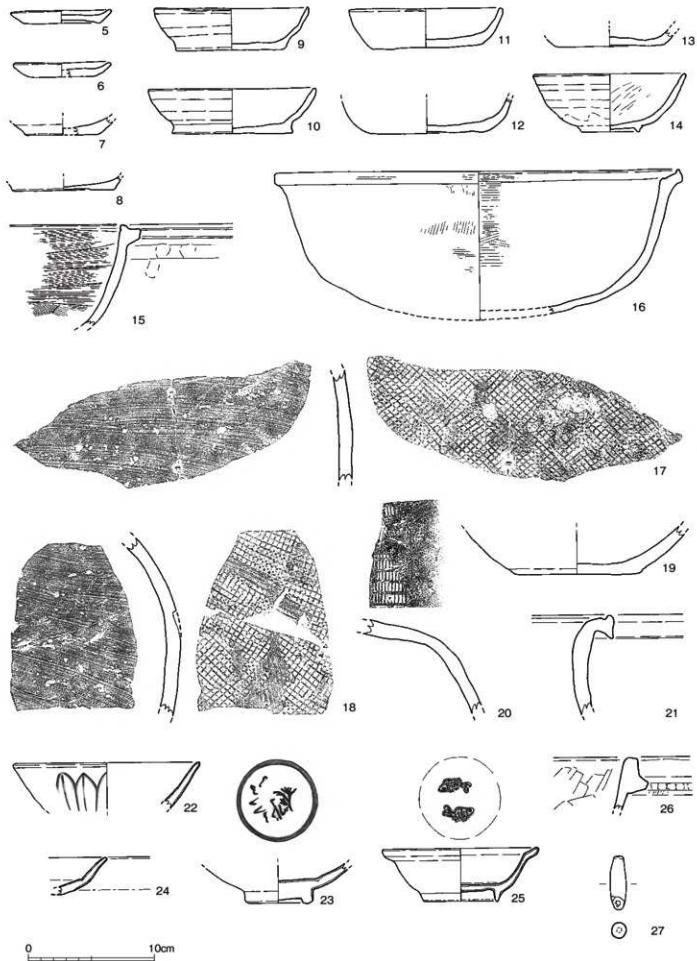
建てられた時期は出土物から14世紀初め頃のものと考えられる。建物の性格については不明だが有力武士層の屋敷に付随するやらかの施設であろう。



第11図 3号掘立柱建物跡 (1/60)



第12図 堪穴建物跡 (1/80)



第13図 堅穴建物跡出土遺物（1）(1/3)

出土遺物（第13・14図、図版19・20）

**土師器** 5～6は小皿。いずれもロクロナデ成形の後、底部回転糸切りで仕上げる。7～13は壺。小皿と同様にロクロナデによって成形され、底部は回転糸切りで仕上げる。底部に板状压痕を残すものもあり、その多くは見込みに不定方向のナデを施す。法量は口径12.2～13.2cm、底径8.6～9.5cm、器高3.2～3.6cmとある程度の規格性をもつ。

**瓦器** 14は塊。小ぶりの塊で、高台はナデ調整で貼り付けて仕上げる。内面には規格性のないヘラミガキを施す。

**瓦質土器** 15は鍋。口縁部外側に台形の貼付け突窓をめぐらし、内面は細かいヨコハケ調整で仕上げる。13世紀頃の所産。17・18は甕で同一個体の可能性がある。外面に格子目タキを施し、その後ハケ調整、内面は細かいヨコハケ調整で仕上げる。

**土師質土器** 16は鍋。くの字形に屈曲する口縁をもち、端部をはね上げて仕上げる。14世紀前半頃の所産。

**須恵質土器** 19は鉢。胎土、色調より東播系（神出窯・魚住窯）の製品と考えられる。

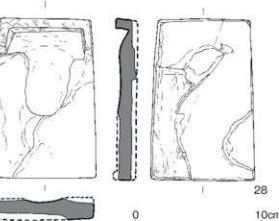
**陶器** 20・21は大甕。20は胎土、色調より備前焼と考えられる。肩部の破片で、外面に細かい短冊状のタキを施す。21は特徴的なN字形の口縁部から常滑焼と考えられる。

**青磁** 22・23は碗。22は外面に鎌連弁をめぐらすもので、大宰府分類（以下〔大〕）龍泉窯系青磁挽II-a類で13世紀前後～半の所産。23は見込みに花卉文？を施するもので、〔大〕龍泉窯系青磁挽I-1c類で12世紀中頃～後半の所産。

24は皿。〔大〕龍泉窯系青磁皿I-1a類で12世紀中頃～後半の所産。25は壺。見込みに双魚の貼付け文を有し、くの字に屈曲する口縁をもつ。〔大〕龍泉窯系青磁皿III-3c類で13世紀中頃～14世紀初頭前後の所産。

**石製品** 26は滑石製鏽で鶲部の破片。28は長方形をなす観で頁岩製かと思われる。表面は陸部の剥離が著しく、海部に墨の痕跡を残す。裏面も一部旧形を留めるものの全体的に剥離する。

**土製品** 27は管状土錘。形態から魚網錘と思われる。

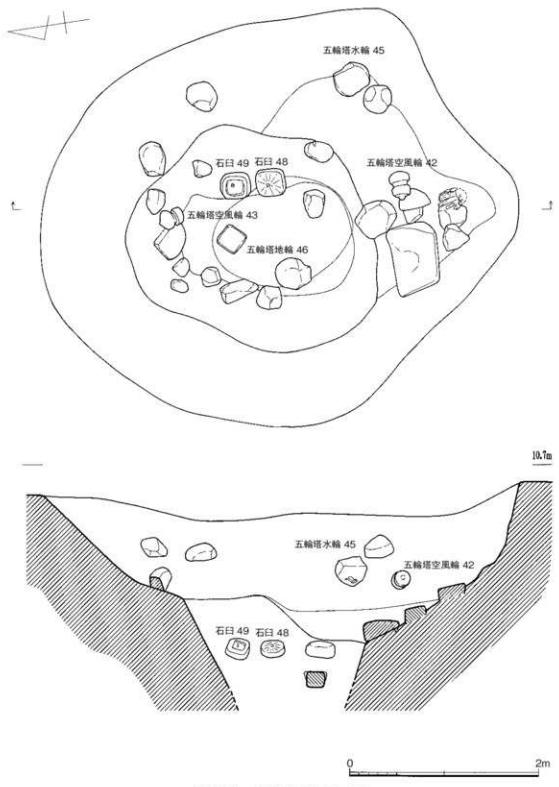


第14図 堅穴建物跡出土遺物（2）(1/3)

#### (4) 井戸跡

1号井戸跡（SE1）（第15図、図版8）

調査区の南端で検出した井戸跡である。SD4とSD6を切る。不整円形の二段掘りで検出面で長径5.0mを測る。湧水等のため深さは2.2mまでしか確認できなかった。南側に井戸への界隈用のものと考えられる石段の痕跡が認められた。井戸内には白色や五輪塔の部材が複数投棄されていた。調査時には井筒などが多く素掘り状だったが、2号と井戸跡とプランが類似したことから井筒などが



第15図 1号井戸跡 (1/40)

抜き取られたことも考えられる。

この井戸は出土遺物から16世紀までは機能していた可能性が高い。

出土遺物 (第16・17・18図、図版21・22)

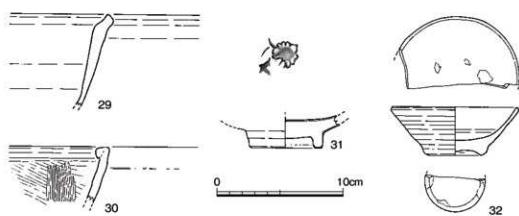
**瓦質土器** 29は鉢か。体部は直線的に外傾し、口縁部はやや外反する。スヌが付着する。30は擂鉢。口縁端部を内側に折返し、突起状にナデで仕上げる。内側にナメハケを施し、その上から9条1単位の摺目を施文する。スヌが付着する。

**青磁** 31は碗。見込みに花弁文を施文するもので、〔大〕龍泉窯系青磁碗Ⅰ類もしくはⅡ類。外面上にスヌが付着する。

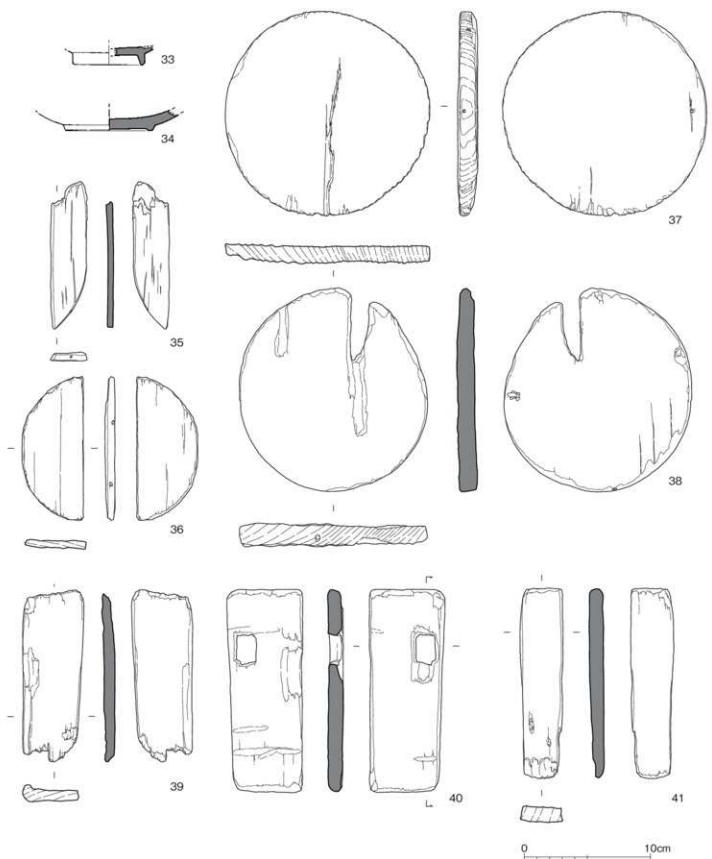
**粉青沙器** 32は壺。ロクロナデ成形後、粉引（白泥をズブ掛けしたもの）による白化粧を施す。俗に粉引茶碗と称される一群である。見込みと高台に3ヶ所ずつ砂目跡を残すため、重ね焼きされたことが分かる。16世紀前半～後半の所産。

**木製品** 33・34は漆椀。33は朱漆、34は黒漆で、34は朱漆の上から黒漆が塗布されるが、図案は明確でない。35～38は曲物の蓋と考えられる。円形もしくは円弧をもつ薄板で、37は直径16.2cmの完形品。36は半月状の破片で、側面に木釘穴が打たれていることから2枚の板材をつなぎ合わせていたと考えられる。

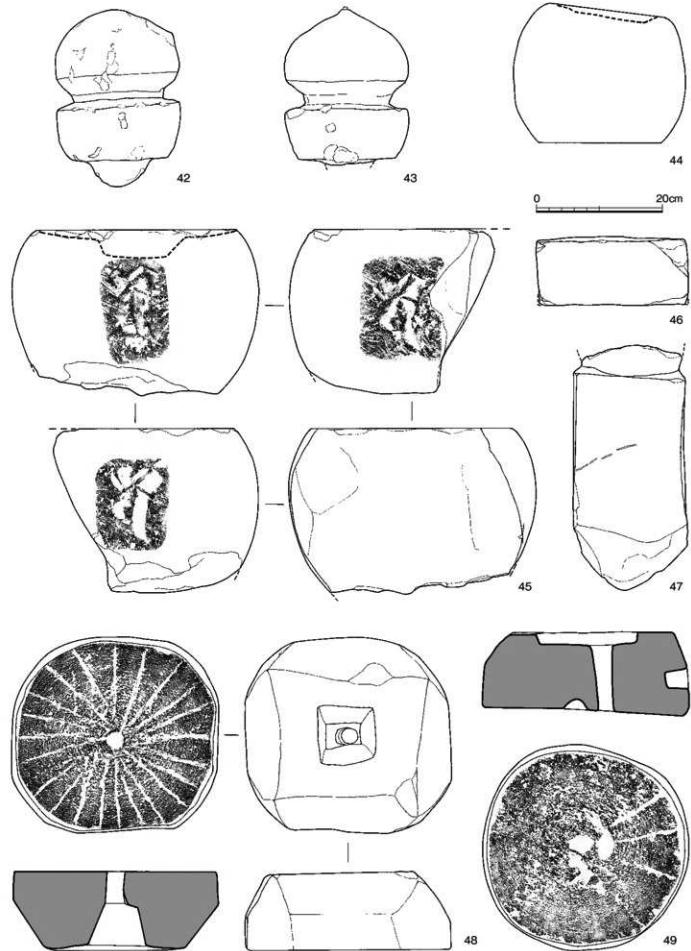
**石製品** 42～47は石塔の部材で、42～47は五輪塔、47は一石五輪塔である。42・43は空風輪。いずれも安山岩系の石材を用いる。44・45は水輪。45は大型品の残欠で、現存する面は3面だが、4面に種子、具体的には北面の「バク」（欠損する）、西面の「パン」、南面の「バー」、東面の「バ」を薬研彫りで刻んだものである。製図の関係上正面を「バー」とするが、本義的には東面を表す「バ」が正面になる。最大幅39.0cm。44・45とも安山岩系の石材を用いる。46は火輪。安山岩系の石材を利用。47の一石五輪塔は空・風・火輪を欠き、水輪の一部より基部にかけての残欠。安山岩系の石材を利用。48は五輪塔の火輪を転用した下臼。目は放射状に刻まれており、粗碎き用と思われる。安山岩製。49は上臼で、平滑な白面に僅かに目が残り、心棒受けがある。側面には挽手を装着する柄穴が穿たれる。花崗岩製。



第16図 1号井戸跡出土遺物 (1) (1/3)



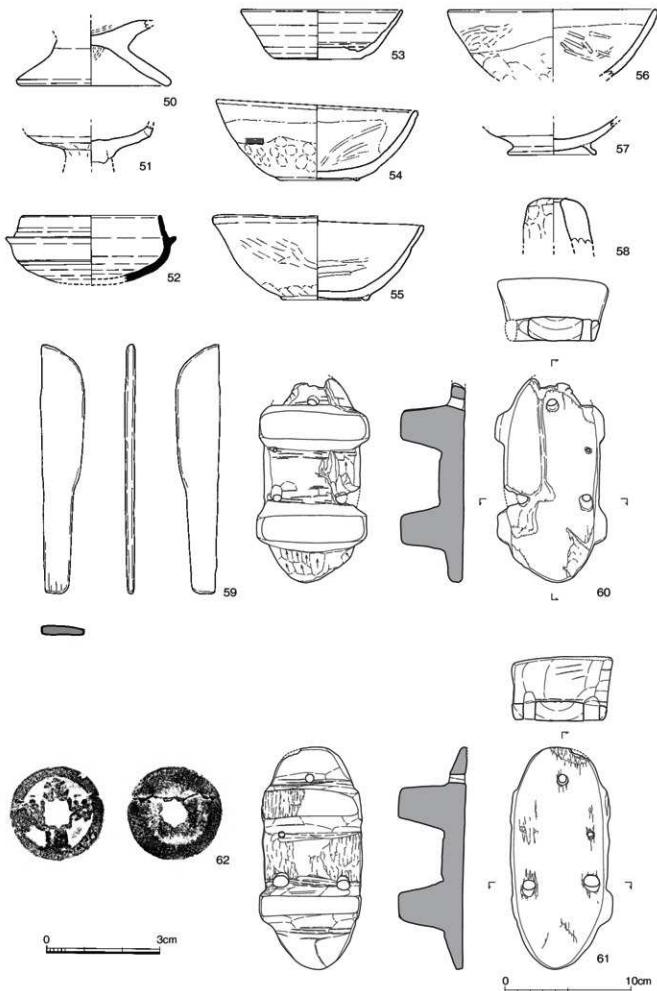
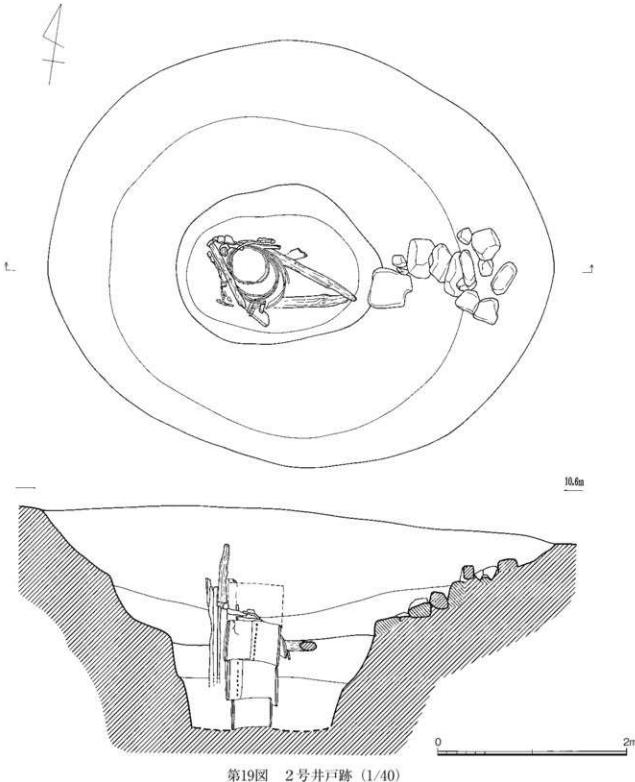
第17図 1号井戸跡出土遺物（2）(1/3)



第18図 1号井戸跡出土遺物（3）(1/6)

2号井戸跡 (SE2) (第19図、図版9・10)

調査区の南側で検出した井戸跡でSD4を切る。平面形は東西に長い楕円形で長径5.3m、短径4.3mを測る。掘方は概ね3段に段掘りされている。曲物の井筒を4段重ね、外側に支柱立てて井筒を固定し、その外側を板材で方形に囲み井戸枠としている。井筒の径は最上段で60cm、最下段で40cmである。東側から井戸の中心方向に石段状に石材が配され、昇降用のものとみられる。最下段の井筒の下は砂地となっておりそこを井戸の底部とすると深さは2.4mである。



### 出土遺物（第20図、図版23）

**弥生土器** 50は脚部片で脚付鉢かと思われる。摩滅が著しい。51は高環の环部片。同じく摩滅が著しい。

**須恵器** 52は壺身の口縁部片。外面下半は回転ヘラ削りで丁寧に調整する。6世紀前半頃の所産。

**土師器** 53は壺。底径に比して口径が約2倍の法量となる。

**瓦器** 54～58は塼。54・55は全形をうかがえる資料で、内外面にミガキ調整を施す。54の外面には指頭痕が残る。高台は低く、粘土紐をナデ付けて高台とする。56は口縁部の破片。57は底部の破片。高台は高く、ナデ調整で貼り付けて仕上げる。

**土製品** 58は輪の羽口片だが金属溶解物の付着はない。胎土は非常に粗い。

**木製品** 59はヘラ状木製品で用途は不明。60・61は下駄。本体と齒が一体となった蓮歯の下駄である。平面形は小判形で、上部の中央に1ヶ所、中央部の左右に一対、合計3ヶ所に鼻緒を通すための孔が穿たれる。

**銭貨** 62は銅錢で元祐通宝。「元」の字を頭として時計回りに行書体で鋳出す。元祐通宝は1086年初鑄の北宋銭。

### 3号井戸跡（SE3）（第21図、図版11）

調査区北側の西際で検出された石組みの井戸である。30～40cm程度の石材を基本的に横に寝かせて野面積みで積み上げる。井戸の径は上部で1.45m、底部で1.0m。底面までは掘り下げなかったが深さは2m前後と推定される。

出土遺物（第22図、図版23）

**土師器** 63は壺。口径、底径に比して器が高いのが特徴的である。

**土師質土器** 64は鍋。口縁部は肥厚し、外側に蓋受けのようには平坦面をもつ。内側はヨコハケ調整で仕上げる。ススが付着する。底部を欠損。

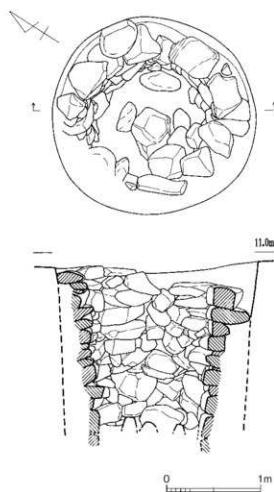
### 4号井戸跡（SE4）（第24図、図版11）

調査区中央付近で検出した素掘りの井戸である。平面楕円形プランで長径1.28m、短径1.12m、深さ1.85mを測る。

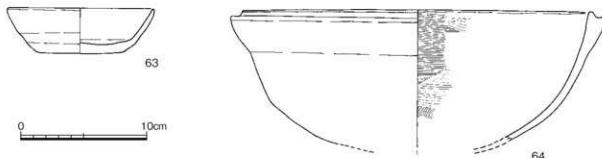
出土遺物なし。

### 5号井戸跡（SE5）（第24図）

調査区の中央東側で検出した素掘りの



第21図 3号井戸跡 (1/40)



第22図 3号井戸跡出土遺物 (1/3)

井戸である。平面楕円形で長径1.13m、短径0.97m、深さ1.8mを測る。

出土遺物なし。

### 6号井戸跡（SE6）（第24図、図版12）

調査区の中央やや北寄りで検出した素掘りの井戸である。上面は不整形で長径2.65m、短径2.45m、中位以下は円形となる。底面まで掘り下げなかつたが深さ2.5m前後と推定される。

### 出土遺物（第23図、図版24）

**土師器** 65は壺。ロクロナデ成形の後、底部回転系切りで仕上げる。底部に板状圧痕を残す。

**須恵質土器** 66は鉢。胎土、色調より東播系（神出窯・魚住窯）の製品と考えられる。

**土師質土器** 67は鍋。くの字形に屈曲する口縁をもち、端部をね上げて仕上げる。内外面はハケ調整。14世紀前半頃の所産。

**瓦質土器** 68は壺。口縁部は丁寧にナデ調整され、仕上がりがシャープである。外面の頸部から肩部にかけてタテハケを施す。

**白磁** 69は皿。口縁部の釉薬を搔き取ったいわゆる「口禿げ」の皿である。〔大〕皿Ⅸ-1dに分類され、13世紀後半～14世紀前半頃の所産。

**木製品** 70は木綿（穂の子）。中央部分に縄掛けのための割り込みをもつ。断面は楕円形。71は曲物の蓋と考えられる。円形の薄板で5分の1ほどを欠く。直径23.5cm。側面に木釘穴が打たれていることから2枚の板材をつなぎ合させていたと考えられる。

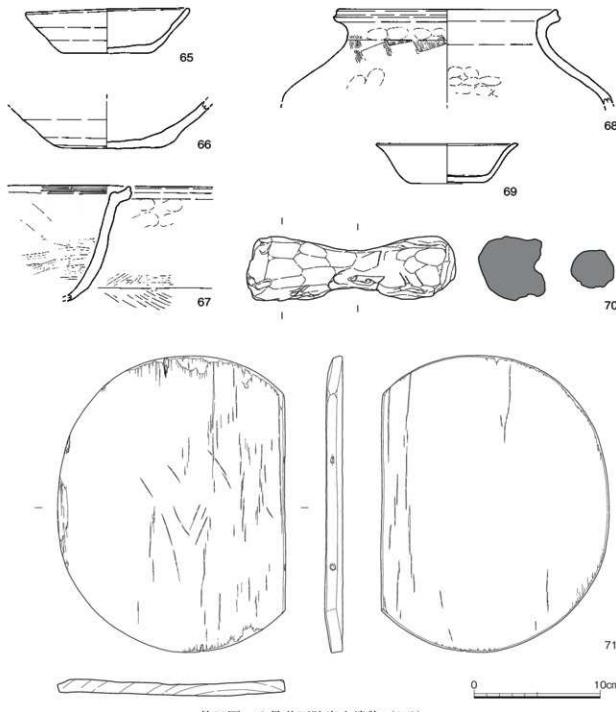
### 7号井戸跡（SE7）（第24図、図版12）

調査区の中央で検出した遺構でSK7に切られる。平面は円形で直径1.2m、深さは1.4mやや浅いが素掘りの井戸と判断した。

出土遺物なし。

### 8号井戸跡（SE8）（第24図、図版12）

調査区の中央やや東寄りで検出した井戸でSK18を切る。平面は円形で断面は2段になっている。下段の上部には輪になった井筒状の曲物が残っていたが1段のみでそれより下には認められなかつた。

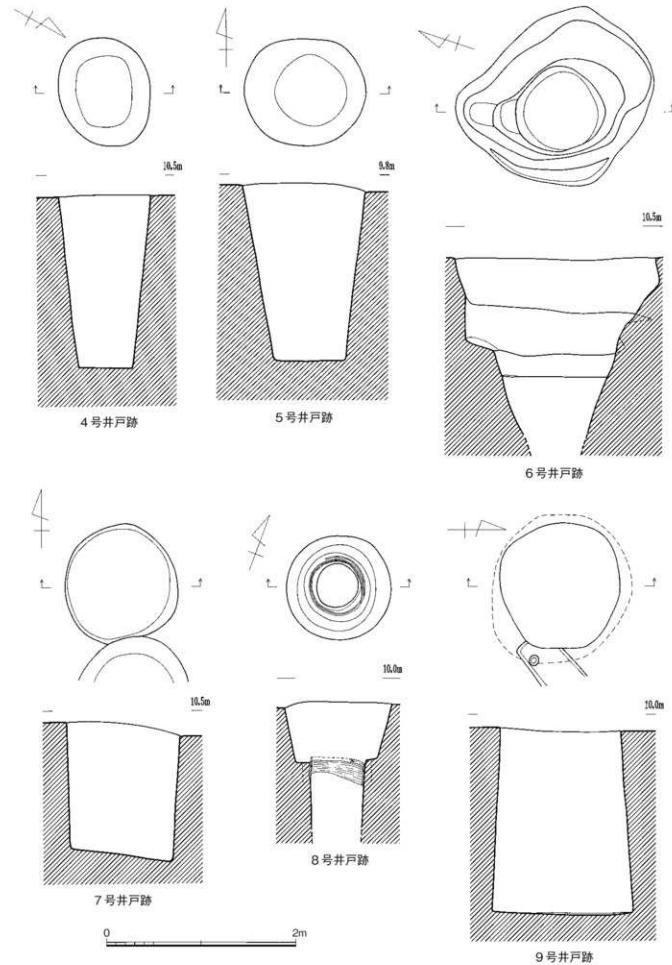


第23図 6号井戸跡出土遺物 (1/3)

た。検出面の径1.1m、井筒状曲物の径55cm、深さ1.4mまで掘り、それ以上の掘り下げを断念した。  
出土遺物なし。

#### 9号井戸跡 (SE9) (第24図)

調査区の北端付近で検出した遺構である。上面は径1.25m、底面は径1.5m、深さ1.95m。井戸として扱ったが、上面より底面が広くなる形状から貯蔵穴である可能性も高い。  
出土遺物なし。



第24図 4～9号井戸跡 (1/40)

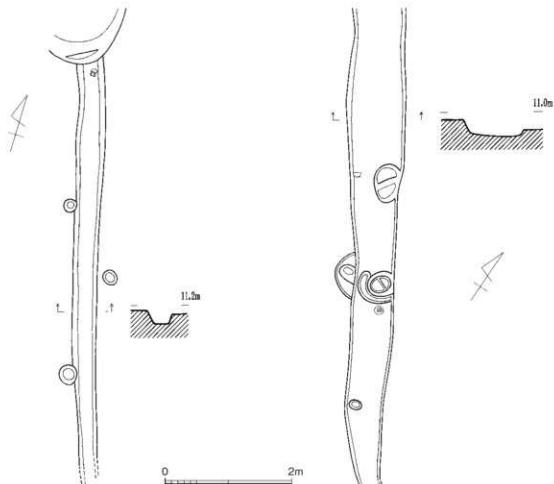
## (5) 溝跡

### 1号溝跡 (SD1) (第25図)

調査区西側を南北方向に直線的に走る溝でSK11に切られる。南北端は削平され、確認できる長さは約11mである。溝の幅や深さは場所により異なるが断面計測地点での検出幅は40cm、深さは20cmである。

出土遺物 (第26図、図版24)

弥生土器 72は壺と思しき口縁部の破片。73は器台もしくは支脚の脚部片。



第25図 1号・2号溝跡 (1/60)

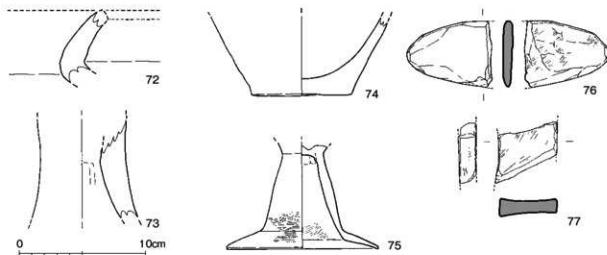
### 2号溝跡 (SD2) (第25図)

調査区西側を北西から南東に走る溝で、確認できる長さは約8mである。断面計測地点での検出幅は90cm、深さは25cmである。

出土遺物 (第26図、図版24)

弥生土器 74は壺もしくは壺の底部片。

古式土器 75は高壙の脚部片。内外面は細かいヘラミガキで仕上げる。



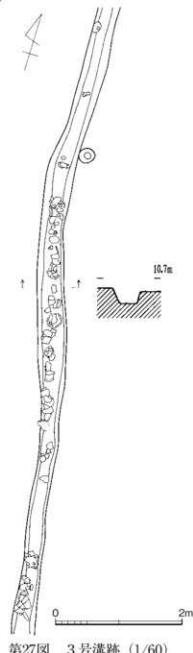
第26図 1号・2号溝跡出土遺物 (1/3)

石器 76は石庖丁。輝緑凝灰岩製で全体の半分ほどが残る。紐孔はない。77は砂岩製の砥石。2面を欠き、4面が砥面となる。5cm大の破片。

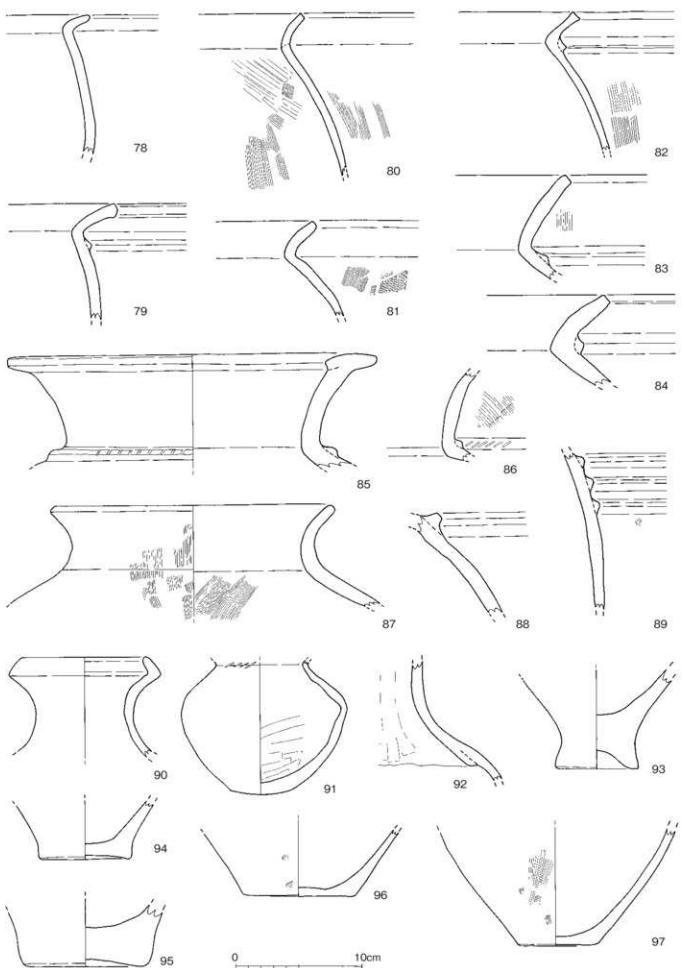
### 3号溝跡 (SD3) (第27図、図版13)

調査区南側の西寄りを南北方向に走る溝で堅穴建物に切られる。確認できる長さは約33mである。溝の幅や深さは場所により異なるが断面計測地点での検出幅は40cm、深さは25cmである。出土遺物 (第28～30図、図版24～27)

弥生土器 77～82は壺の口縁部片。79は頸部に突帯をめぐらす。82の口縁端部はヨコナデ調整により摘み上げたように仕上がっている。遠賀川以東の弥生中期土器に多く見られる、いわゆる「跳ね上げ口縁」状を呈す。83～92は壺の破片。85は鶴形口縁の丹塗り広口壺で、頸部は刻目を施した突帯をめぐらす。86も同様の頸部の破片。89は胴部の破片で、少なくとも3条の突帯をめぐらす。90は袋状口縁壺の口縁部破片。91は凸レンズ状の底部をもつ破片で、内面はヘラ削り調整。92は二重口縁壺の肩部破片か。93～101・104は壺もしくは壺の底部片。104は凸レンズ状になる。102・103・105は壺の底部片。105は底部穿孔を施す。106は二重口縁壺で全体の半分ほどが残る。凸レンズ状の底部から長胴形をなし、二重口縁となる。摩滅が著しいが内外面はハケ調整で仕上げる。107は口縁部を欠くが長胴の胴部をもつ壺。108～112は高壙。112は壺部片で、口縁部が大きく開かない。112は橢形の壺部に大きく開く脚をもつ。113・114は鉢。113は平底で、底部から口縁部にかけてはラッパ状に大きく開く。114は丸底を呈し、長胴で口縁部は緩やかに内傾する。115～118は器台。117・118は粗製器種で、表面に指痕を多く残す。119は支脚。

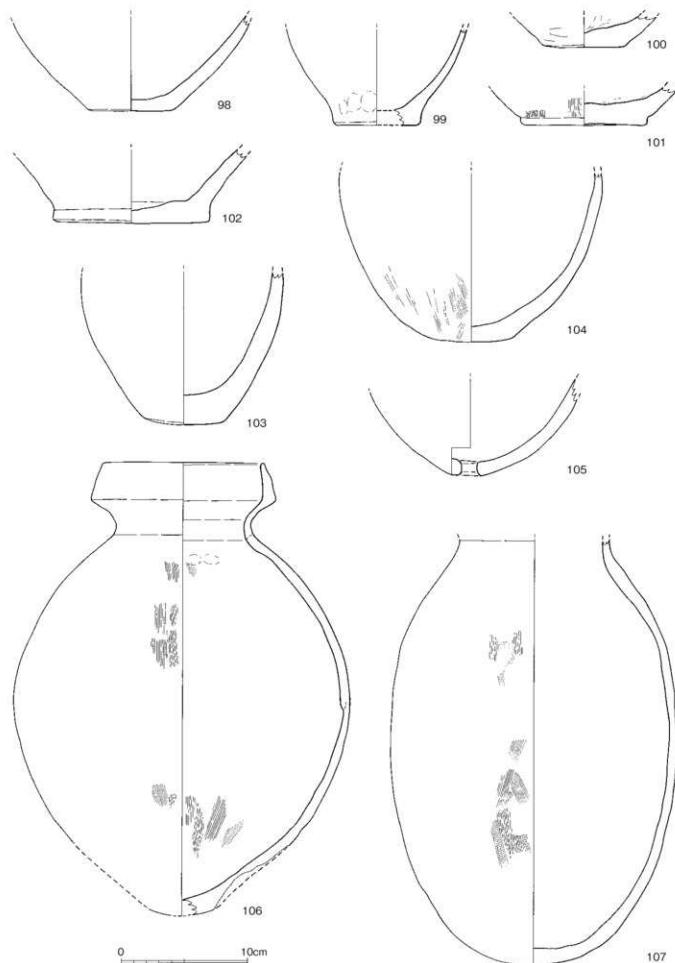


第27図 3号溝跡 (1/60)



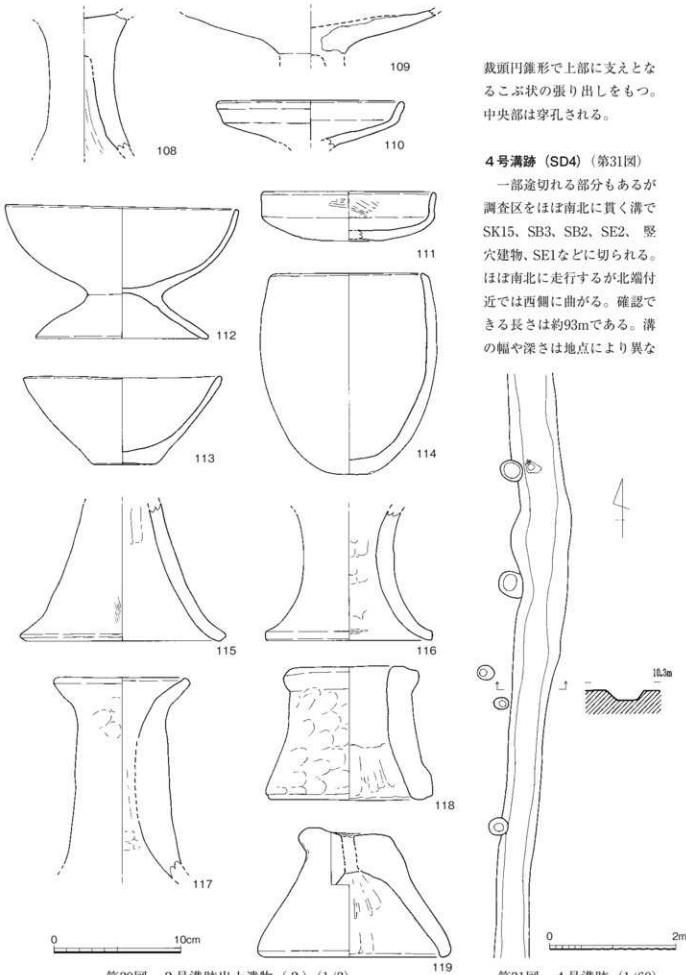
第28圖 3號溝跡出土遺物（1）(1/3)

- 28 -



第29圖 3號溝跡出土遺物（2）(1/3)

- 29 -

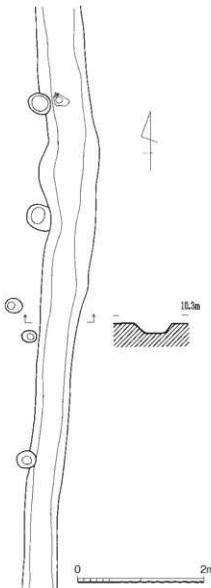


第30図 3号溝跡出土遺物（3）(1/3)

裁頭円錐形で上部に支えとなるこぶ状の張り出しをもつ。中央部は穿孔される。

**4号溝跡（SD4）（第31図）**

一部途切れる部分もあるが調査区には南北に貫く溝でSK15、SB3、SB2、SE2、堅穴建物、SE1などに切られる。ほぼ南北に走行するが北端付近では西側に曲がる。確認できる長さは約93mである。溝の幅や深さは地点により異なる。



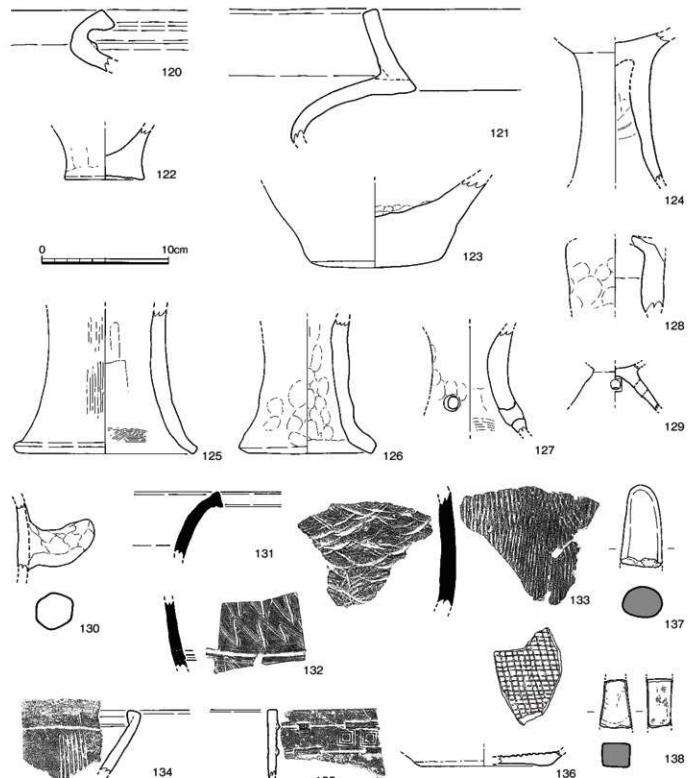
第31図 4号溝跡（1/60）

るが断面計測地点では検出幅60cm、深さは18cmである。

出土遺物（第32図、図版27・28）

**弥生土器** 120は壺の口縁部片。頸部に突帯をめぐらす。121は大型の二重口縁壺の口縁部破片。

122・123は壺もしくは甕の底部片。124は大型のもので、凸レンズ状のプロポーションをとる。



第32図 4号溝跡出土遺物（1/3）

は高坏の脚部片。125～127は器台。125は外面をハケ調整で仕上げる。126・127は粗製器種で、表面に指痕が多く残す。127は3方向の円形透かしをもつ。128は支脚か。

**古式土器器** 129は器台破片。脚部に3方向の円形透かしをもつ。

**土器器** 130は把手の破片で、瓶に伴うものと思われる。

**須恵器** 131は壺。口縁部の破片で、端部は肥厚する。132は器台か。脚部の破片で短冊状の長方形透かしが上下に開けられる。透かしの間には2条の波状文を施す。133は壺。胴部の破片で、外側は平行タキ目痕、内面には青海波の当具痕を残す。

**瓦質土器** 134は擂鉢。口縁部端を内側に折返し、突帯状にナデて仕上げる。内側に7条1単位の褶文を施文する。135は平面形で方形になる火鉢。口縁部外側に2条の突帯をめぐらせ、その間に雷文を施文する。

**施釉陶器** 136は鉢皿。見込みに格子状の御目を刻み、木灰を原料とする灰釉をかける。底部はヘラ切り調査。釉調や類例より古瀬戸と思われる。

**石器** 137は磨石。玄武岩製で6cm大の破片。138は珪質頁岩を用いた砥石。2面を欠き、4面が砥面となる。4cm大の破片。

#### 10号溝跡（SD10）（第33図、図版13）

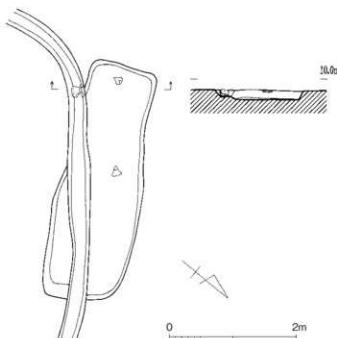
調査区北東部で検出された溝で、SK20、3号住居跡を切る。コの字型に屈曲する溝で確認できる長さは約13mである。溝の幅や深さは地点により異なるが断面計測地点では検出幅30cm、深さは10cmである。

出土遺物（第34図、図版28）

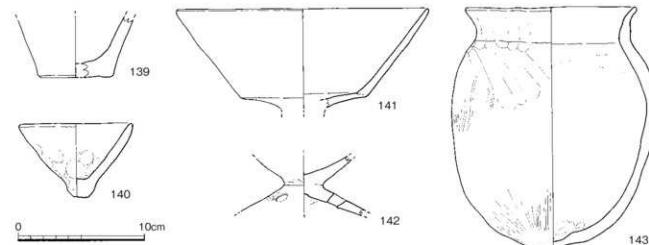
**弥生土器** 139は壺の底部片。140は壺底から小鉢とした。ナデ、オサエにより成形する。

古式土器器 141は高坏。坏部片で、口縁部にかけてラッパ状に大きく開く。142は器台。脚部に透かし孔をもつ。外面はヘラミガキ調整で仕上げる。

**土器器** 143は壺。ほぼ完形で、外面はタテハケ後ナデ調整で仕上げる。7世紀前後頃の所産か。



第33図 10号溝跡（1/60）

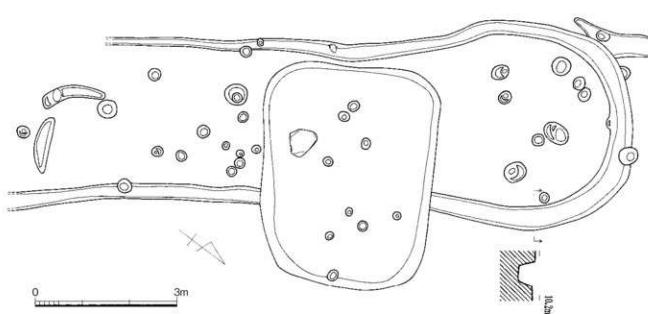


第34図 10号溝跡出土遺物（1/3）

#### 11号溝跡（SD11）（第35図、図版14）

調査区北側で検出された溝でSK19を切る。現況では北側で折り返すU字型の平面プランを呈するが南側が削平で途切れるため精円の環状に閉じるものかは判然としない。確認できる溝の長さは約26mである。溝の幅や深さは地点により異なるが断面計測地点では検出幅55cm、深さは35cmである。

出土遺物なし。



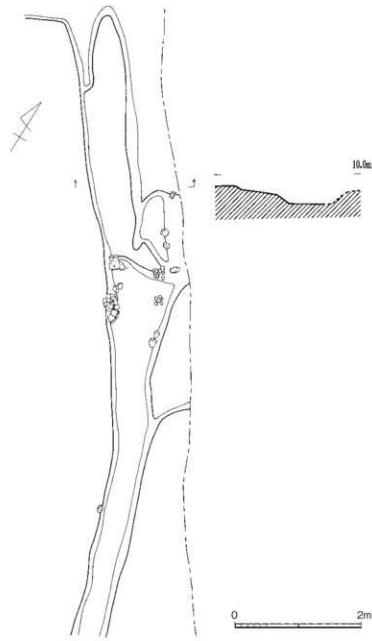
第35図 11号溝跡（1/80）

12号溝跡 (SD12) (第36図、図版14)

調査区北東部で検出された溝で南北方向に走行する。確認できる長さは約22mであり北側は擾乱を受ける。溝の幅や深さは地点により異なるが幅50cm、深さは20cm前後である。

出土遺物 (第37図、図版28・29)

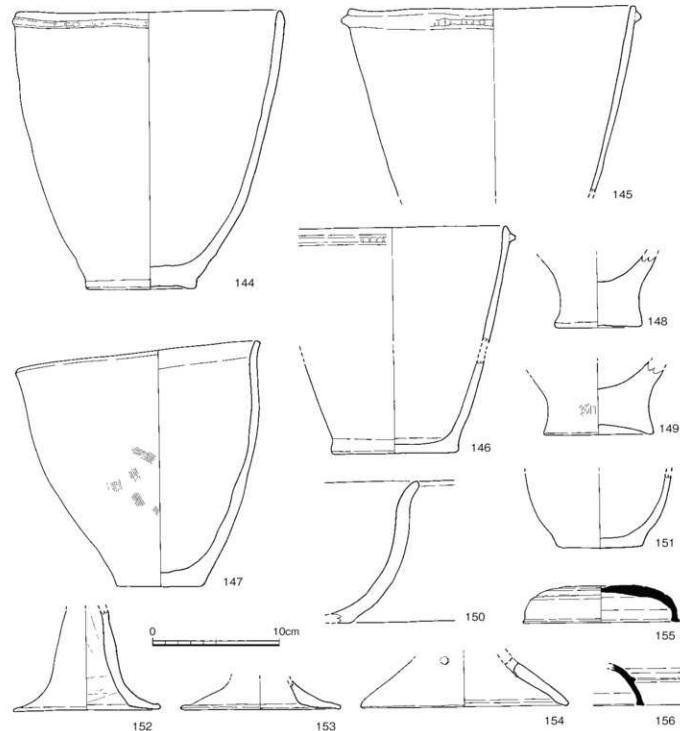
**弥生土器** 144～149は甕。144は平底で体部はゆるい曲線で立ち上がる。口縁部に刻目突帯をめぐらす。145・146も144と同様の特徴をもつ。147も平底だが、口縁部に刻目突帯ではなく、如意形口縁を呈す。144～147はその特徴から弥生時代前期中頃（板付IIa期）の所産と考えられる。148・149は底部片。150は鉢。平底と思われ、丸みを帯びた胴部をもち、口縁部は外反する。151は壺。凸レンズ状の底部をもつ。



第36図 12号溝跡 (1/60)

**古式土師器** 152・153は高杯。いずれも脚部片。154は器台か。透かし孔をもつ。

**須恵器** 155・156は坏蓋。155は回転ナデ成形の後、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。7世紀初頭頃の所産か。156は丁寧なつくりで仕上がりがシャープである。5世紀末頃の所産。



第37図 12号溝跡出土遺物 (1/3)

## (6) 土 坑

### 1号土坑 (SK1) (第38図)

調査区南側で検出された不整形の土坑。長径2.5m、短径1.43m、深さ60cm。2箇所のテラスを有し底面は平坦をなす。

出土遺物なし。

### 2号土坑 (SK2) (第38図)

調査区中央で検出された楕円形の土坑。長径1.3m、短径0.85m、深さ15cm。底面は平坦をなす。

出土遺物なし。

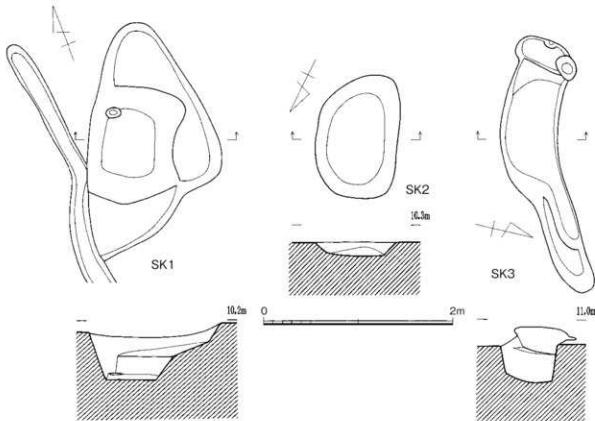
### 3号土坑 (SK3) (第38図)

調査区中央部の西端で検出された不整形の土坑。長径2.75m、短径0.6m、深さ60cm。1段のテラスを有す。

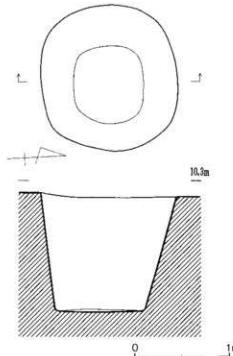
出土遺物なし。

### 4号土坑 (SK4) (第39図、図版14)

調査区中央で検出された円形の土坑。径1.5m、深さ12m。底面は平坦な形状をなす。



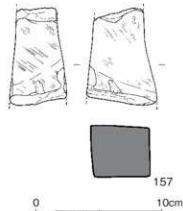
第38図 1号・2号・3号土坑 (1/40)



第39図 4号土坑 (1/40)

### 出土遺物 (第40図、図版29)

石器 157は珪質頁岩を用いた砥石。2面を欠き、4面が砥面となる。8cm大の破片。



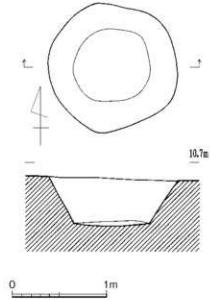
第40図 4号土坑出土遺物 (1/3)

### 5号土坑 (SK5) (第41図、図版15)

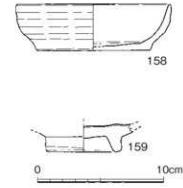
調査区中央部の西寄りで検出された円形の土坑。径1.35m、深さ50cm。底面は平坦な形状をなす。

### 出土遺物 (第42図、図版29)

土師器 158は壊。全体の4分の1程度残存する。  
青磁 159は碗。底部半で、外面は露胎であるため同安窯系の製品と考えられる。



第41図 5号土坑 (1/40)

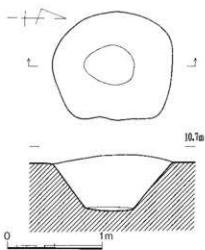


第42図 5号土坑出土遺物 (1/3)

### 6号土坑 (SK6) (第43図)

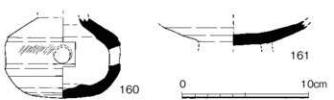
調査区中央部の西寄りで検出された不整形の土坑。長径1.25m、短径1.15m、深さ55cm。底面は平坦な形状をなす。

出土遺物 (第44図、図版29)



第43図 6号土坑 (1/40)

**須恵器** 160は底の脚部片。復元最大径10cm弱で、6世紀後半頃の所産か。161は高环。脚部が剥離した坏部片で、外面は回転ヘラ削り調整によって仕上げる。



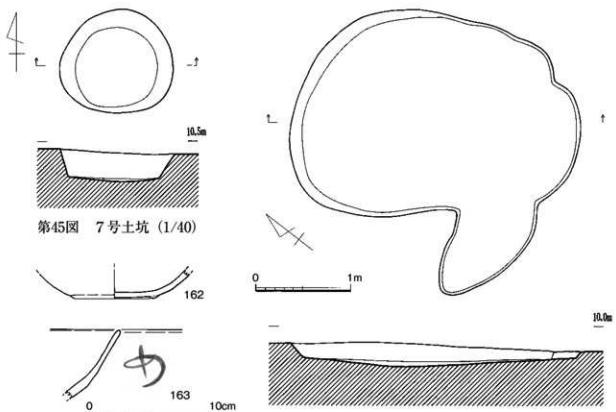
第44図 6号土坑出土遺物 (1/3)

#### 7号土坑 (SK7) (第45図)

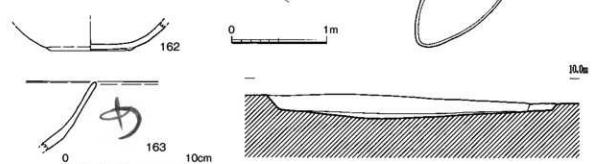
調査区中央に位置SE7を切る円形の土坑。直径12m。深さ30cm。底面は平坦な形状をなす。中世の造営と考えられる。

出土遺物 (第46図、図版29)

**瓦器** 162は底部片。163は口縁部の破片で、外面に「め」の字の墨書がある。



第45図 7号土坑 (1/40)



第46図 7号土坑出土遺物 (1/3)

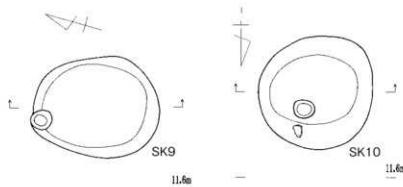
第47図 8号土坑 (1/40)

#### 8号土坑 (SK8)

(第47図、図版15)

調査区やや北より東側で検出された不整形の土坑。おそらく2つの土坑が切りあっていたものと考えられる。長径3m。深さ20cm。底面は平坦な形状をなす。

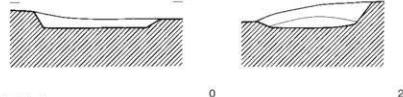
出土遺物なし。



#### 9号土坑 (SK9) (第48図)

調査区中央西側で検出された梢円形の土坑。長径1.35m、短径1.05m、深さ15cm。底面は平坦な形状をなす。

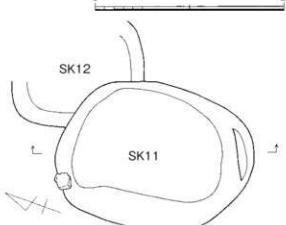
出土遺物なし。



#### 10号土坑 (SK10) (第48図、図版15)

調査区中央西側で検出された円形の土坑で1号住居に切られる。径1.2m、深さ20cm。土坑内部のピットは1号住居跡の主柱穴である。

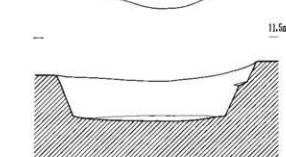
出土遺物なし。



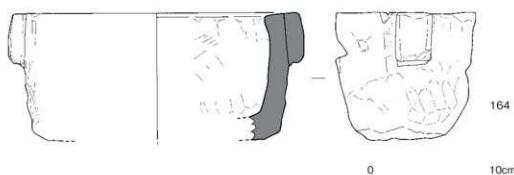
#### 11号土坑 (SK11) (第48図、図版16)

調査区中央西側で検出された梢円形の土坑で1号住居、SD1、SK12を切る。長径2.1m、短径1.6m、深さ50cm。底面は平坦な形状をなす。

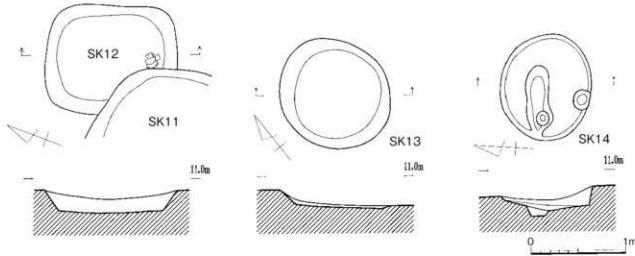
出土遺物 (第49図、図版29)



第48図 9号・10号・11号土坑 (1/40)



第49図 11号土坑出土遺物 (1/3)



第50図 12号・13号・14号土坑 (1/40)

#### 12号土坑 (SK12) (第50図、図版16)

調査区中央西側で検出された隅丸方形の土坑で1号住居、SD1を切り、SK11に切られる。長径2.1m、1.15m、深さ50cm。底面は平坦な形状をなす。

#### 13号土坑 (SK13) (第50図)

調査区中央西側で検出された円形の土坑。径1.2m。深さ10cm。底面は平坦な形状をなす。  
出土遺物なし。

#### 14号土坑 (SK14) (第50図)

調査区中央西側で検出された円形の土坑。径1.1m。深さ20cm。底面に溝状の掘り込みがある。  
出土遺物なし。

#### 15号土坑 (SK15) (第51図、図版16)

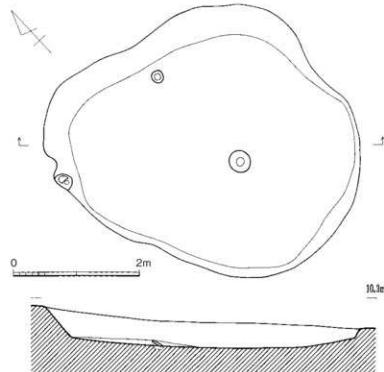
調査区中央や北よりで検出された不整形の土坑。長径5.0m、短径4.3m、深さ40cm。底面は平坦である。様々なる時代の遺物が混在するが中世期に埋没したものと考えられる。

出土遺物 (第52図、図版29)

**弥生土器** 165・166は壺の底部片。

**土師器** 167は小皿。ロクロナデによって成形され、底部は回転糸切りで仕上げる。168～170は壺。同じくロクロナデによって成形され、底部は回転糸切りで仕上げる。168・169は底部に板状圧痕を残す。

**須恵質土器** 171は鉢。胎土、色調

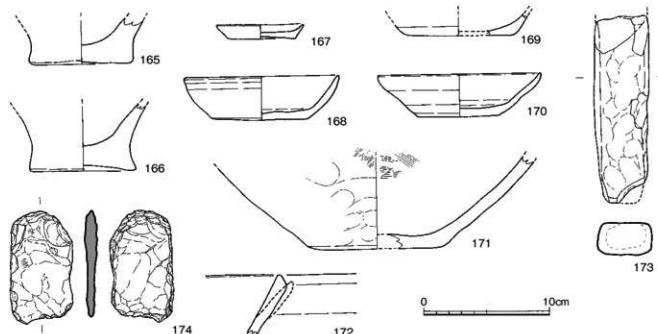


第51図 15号土坑 (1/60)

より東播系(神出窯・魚住窯)の製品と考えられる。172は片口鉢の口縁部片。171と同様に東播系の製品と考えられる。

**土製品** 173は柱状土製品。残存長14.9cmで断面は隅丸長方形をなす。被熱しており支脚の用途が考えられる。

**石器** 174は扁平打製石器の完成品。石材は緑色片岩を用いる。



第52図 15号土坑出土遺物 (1/3)

#### 16号土坑 (SK16) (第53図)

調査区中央付近や北寄りで検出された円形の土坑。径1.65m、深さ45cm。底面は中央が窪む形状をなす。

出土遺物なし。

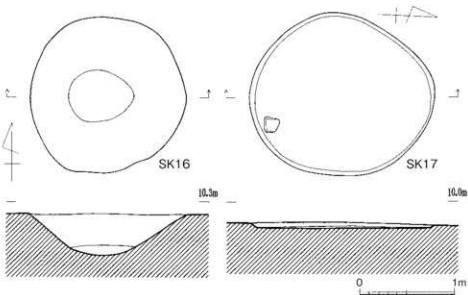
#### 17号土坑 (SK17) (第53図)

調査区中央東側で検出された稍円形の土坑。長径1.95m、短径1.7m、深さ7cm。底面は平坦な形状をなす。

出土遺物

(第54図、図版30)

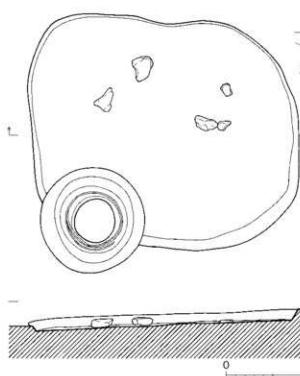
**石製品** 175は滑石



第53図 16号・17号土坑 (1/40)



第54図 17号土坑出土遺物 (1/3)



第55図 18号土坑 (1/40)

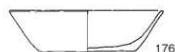
製錬。胴部から底部にかけての破片で、削りの調整単位は規格性がない。

#### 18号土坑 (SK18) (第55図)

調査区中央東側で検出された隅丸方形の土坑でSE8に切られる。長径2.7m、短径2.4m、深さ12cm。底面は平坦な形状をなすが床面は東側に向かって傾斜する。

出土遺物 (第56図、図版30)

土器 176-177は壺。ロクロナデによって成形され、底部は回転糸切りで仕上げる。177は底部に板状圧痕を残す。



第56図 18号土坑出土遺物 (1/3)



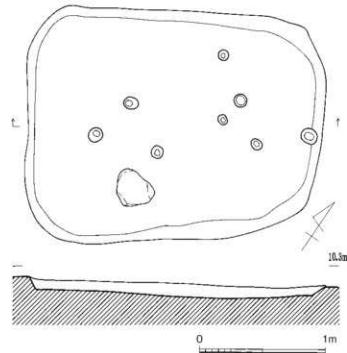
#### 19号土坑 (SK19)

(第57図、図版16)

調査区北側で検出された隅丸方形の土坑でSD4、SD11を切る。長径4.65m、短径3.6m、深さ22cm。底面は平坦な形状をなす。

出土遺物 (第58図、図版30)

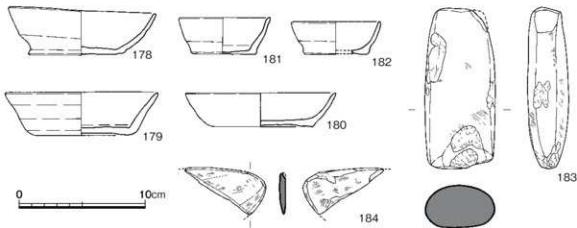
土器 178～180は壺。ロクロナデによって成形され、底部は回転糸切りで仕上げる。板状圧痕はない。法量は口径11.7～12.1cm、底径7.7～8.2cm、器高2.7～3.8cmである程度の規格性をもつ。181-182は小壺。同じくロクロナデによって成形され、底部は回転糸切りで仕上げる。



第57図 19号土坑 (1/60)

法量は口径7.1～7.2cm、底径5.1～5.2cm、器高2.6～3.0cmで、ほぼ同一規格品である。

石器 183は大型蛤刃石斧。福岡市今山産の玄武岩を用いたものと考えられる。184は石包丁。輝緑凝灰岩製で全体の3分の1ほどの残存。縦孔はない。

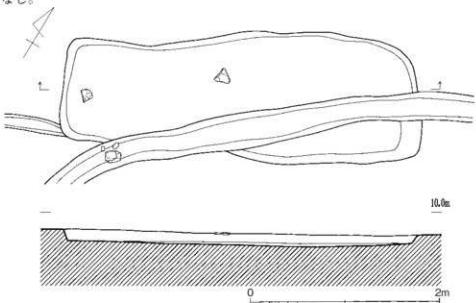


第58図 19号土坑出土遺物 (1/3)

#### 20号土坑 (SK20) (第59図、図版17)

調査区北東部で検出された隅丸長方形の土坑でSD10に切られる。長径3.75m、短径1.35m、深さ13cm。底面は平坦な形状をなす。

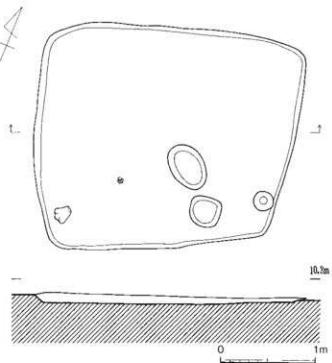
出土遺物なし。



第59図 20号土坑 (1/40)

#### 21号土坑 (SK21) (第60図)

調査区北側で検出された不整方形の土坑である。長径2.8m、短径2.3m、深さ10cm。底面は平坦な形状をなす。



第60図 21号土坑 (1/40)

出土遺物 (第61図、図版30)

**弥生土器** 185はミニチュアの壺。ヨコナデ成形で厚手に仕上げる。

22号土坑 (SK22) (第62図、図版17)

調査区中央西側で検出された長方形の土坑。長径2m、短径1.2m、深さ47cm。底面は平坦な形状をなす。

23号土坑 (SK23) (第62図、図版17)

調査区北東付近で検出された長方形の土坑。長径1.82m、短径1.1m、深さ36cm。底面は平坦な形状をなす。

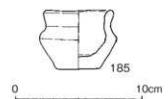
24号土坑 (SK24) (第63図)

調査区北側の東端部で検出された円形の土坑。径0.8m、深さ57cm。底面は平坦な形状をなす。古墳時代の遺構と考えられる。

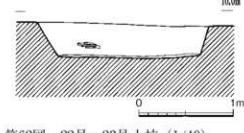
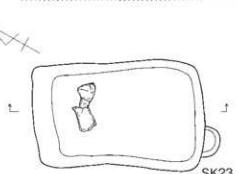
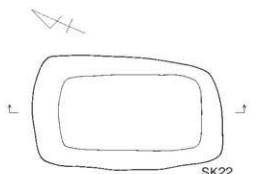
出土遺物 (第64図、図版30)

**弥生土器** 191は鉢。ほぼ完形品。

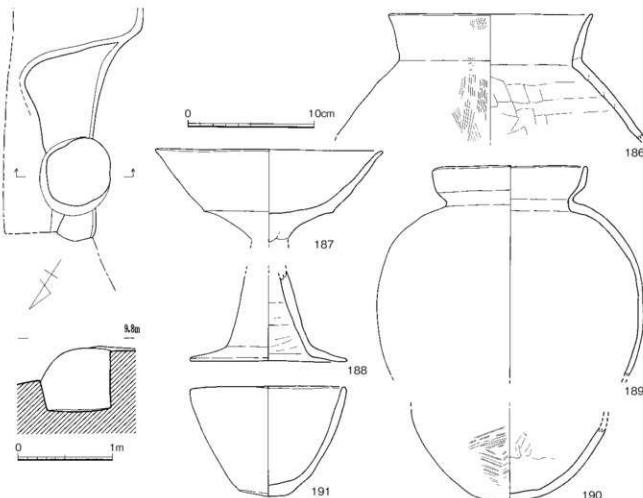
**古式土器** 186は壺。口縁部から胴部の破片で、口縁部は先細りながら真上に開く。外面はタテハケ、内面は削り調整で仕上げる。187・188は高壺。187は壺部片で、口縁部にかけてラップ状に大きく開く。黒斑あり。188は脚部片。図上では187と同一個体に見えるが、胎土が異なるため別個体と判断する。189は二重口縁壺。球形の胴部をもつ。黒斑がある。



第61図 21号土坑出土遺物 (1/3)

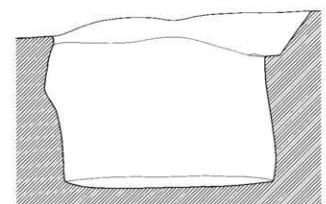
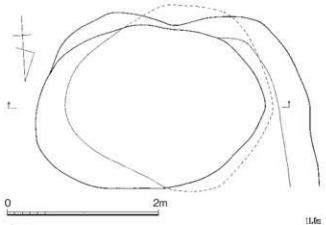


第65図 22号・23号土坑 (1/40)



第63図 24号土坑 (1/40)

第64図 24号土坑出土遺物 (1/3)



ある。190は壺もしくは壺の底部片。丸底をなし、外表面は平行タタキ、内面は削り調整で仕上げる。

#### (7) 地下式土壙 (第65図、図版17)

調査区の北側の西端で検出した遺構である。本遺跡では1基のみ確認された。

長径3m、短径2.15mの楕円形平面プランの大きな掘り込みとして検出された。床面まで掘削すると深さは2.28mに達した。底面は長径2.75m、短径2.45mで床は平坦。北面、南面、西面でオーバーハングしていた。

井戸のように湧水は無く、その形状から地下式土壙と判断した。天井の構造、形態は不明である。また出土遺物が無いことから貯蔵庫なのか、墓などの宗教施設なのか遺構の性格については判断することができなかった。

### (8) ピット (第5図)

調査区からは多数のピットが検出されたが遺物が確認された2つのピットを報告する。

83号ピットは調査区中央やや南の西端近くで確認された。185号ピットは調査区北東部で検出された。いずれも性格は不明である。

出土遺物 (第66図、図版30)

石器 192は投弾か。5cm大で花崗岩製の完形品。83号ピット出土。193は石包丁。輝緑凝灰岩製で全体の三分の一ほどの残欠。紐孔はない。185号ピット出土。

### (9) 包含層出土遺物

調査区はほぼ全面にわたり後世の堆積土に覆われており遺構検出の過程で多くの遺物が採取された。調査区の西側は丘陵となっておりこれらの遺物は西側からの流れ込みか、整地にともなうものと考えられる。この包含層の存在は、西側の丘陵上あるいは丘陵斜面に当該期の遺構が存在したことを見示すものである。

出土遺物 (第67~68図、図版31~32)

弥生土器 194は壺。頸部のやや下位に突帯があげ、凸レンズ状の底部をもつ。195~196は器台。196は粗装器種で、表面に指頭痕を多く残す。

古式土師器 197は二重口縁壺。口縁部の破片で、外面にヘラ描きの文様をもつ。

須恵器 198~200は甕。198は口縁部片で、外面は格子目タタキ痕、内面に当具痕を残す。199は頸部の破片。200は5つの胴部片が軸着したもの。2次的に焼台に利用した可能性もある。201は高环の脚部片。

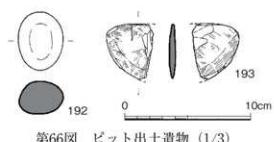
瓦器 202~205は塊。205は全形をうかがえる資料で、他の3点は2分の1程度の残存率である。基本はミガキを最終調整とするが、204の外面上には指頭痕が多く残る。202の高台は高く、他は粘土紐をナデ付けた低い高台である。

瓦質土器 206は火鉢。脚部の破片と思われ、外面上部に菊花をあしらったスタンプを施文する。

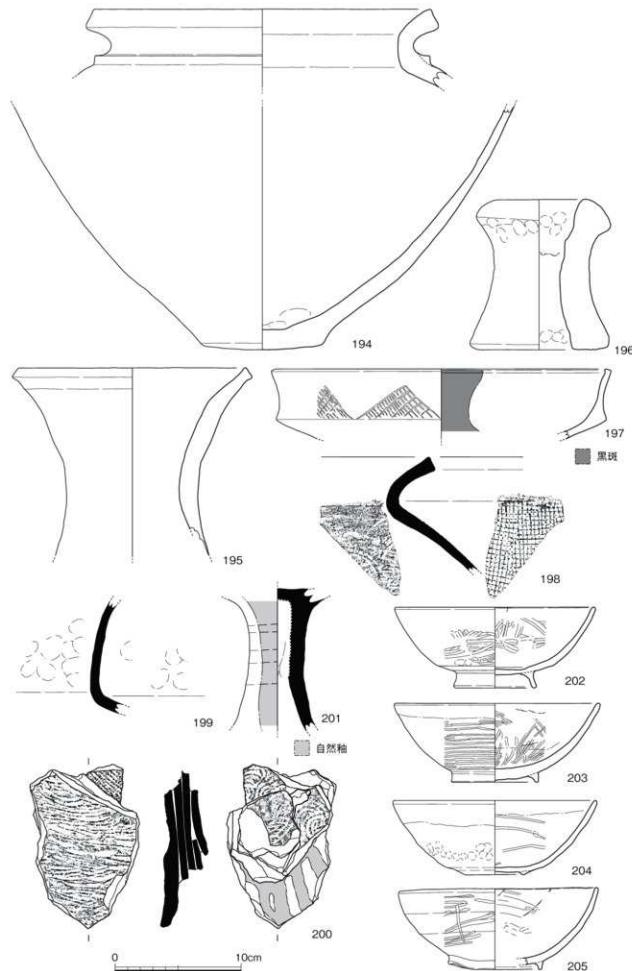
白磁 207は碗。口縁部片で、内面に櫛歯文、外面にヘラ描き文がある。〔大〕碗V-4c類に分類され、12世紀後半の所産。

青磁 208~212は碗。208は見込みに文様を有し、外面に鍋連弁文をもつ。〔大〕龍泉窯系青磁碗I類に分類され、13世紀前後の所産。209は外面無文で、内面に片影蓮華文を有するものか。〔大〕龍泉窯系青磁碗II類で12世紀中頃~後半の所産。210は内面に片影蓮華文を有する。〔大〕龍泉窯系青磁碗I・2類で12世紀中頃~後半の所産。211は外面に鍋連弁文を施文する。胎土、釉調とともに優品である。〔大〕龍泉窯系青磁碗III・5b類で13世紀中頃~14世紀初頭の所産。212は底部片。〔大〕同安窯系青磁碗II類で12世紀中頃~後半の所産。213は皿の底部片。内面にヘラによる文様とジグザグ状の櫛点描文を有する。〔大〕同安窯系青磁碗I・2b類に分類され、12世紀中頃~後半の所産。

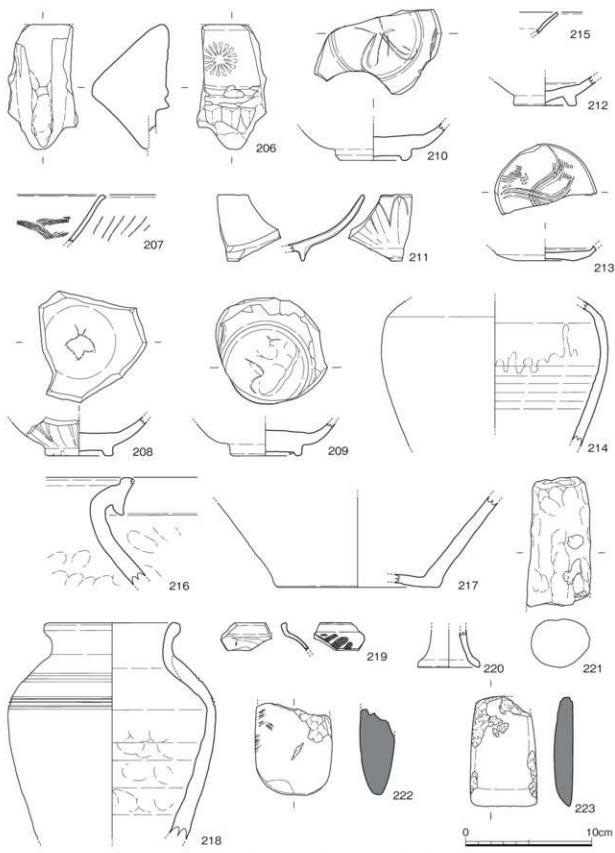
青白磁 214は壺の胴部片。13世紀頃の所産か。



第66図 ピット出土遺物 (1/3)



第67図 包含層出土遺物 (1) (1/3)



第68図 包含層出土遺物（2）（1/3）

**雜釉陶器** 215は碗の口縁部片。16世紀前半～17世紀初頭頃の所産か。

**陶器** 216は大甕。特徴的なN字形の口縁部から常滑焼と考えられる。13世紀頃の所産。217は216同一個体と考えられる底部の破片。218は壺。胎土、色調より備前焼と考えられる。

**施釉陶器** 219は壺か。鉄絵文様を描き浅黄色の釉薬をかける。肥前系の陶器か。220は花瓶の脚部片と思われる。釉調から瀬戸焼か。

**土製品** 221は柱状土製品。残存長12.5cmで断面は格円形をなす。被熱しており支脚の用途が考えられる。

**石器** 222は大型蛤刃石斧。蛇紋岩製で刃部の破片。223は扁平片刃石斧。ほぼ完形で、最大長8.7cm、最大幅5.3cm。蛇紋岩製。

#### (10) 表面採集遺物

包含層遺物と厳密に峻別し難いが遺構検出中、比較的表層付近で採取した遺物を表面採集遺物として報告する。

採集遺物（第69～71図、図版33）

**弥生土器** 224～226は甕。224の口縁端部はヨコナデ調整により摘み上げたように仕上がってい。遠賀川以東の弥生中期土器に多く見られる、いわゆる「跳ね上げ口縁」状を呈す。225も224と同様の破片。226は上げ底状の底部をもつ破片。227・228は広口壺でいずれも口縁部から胴部にかけての破片。227は頸部、胴部にそれぞれ1条の突帶をもつ。228の口縁部は彫動口縁になり、胴部に1条の突帶をもつ。

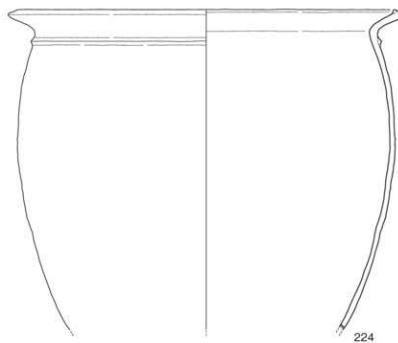
**瓦質土器** 229は擂鉢。底部片で、内側に5条1単位の摺目を施す。底部に板状圧痕を残す。  
**青磁** 230は碗の口縁部片。16世紀頃の所産か。

**雜釉陶器** 231は底部片。見込みに5ヶ所、高台に4ヶ所の砂目跡を残すため、重ね焼きされたことが分かる。16世紀前半～17世紀初頭頃の所産か。

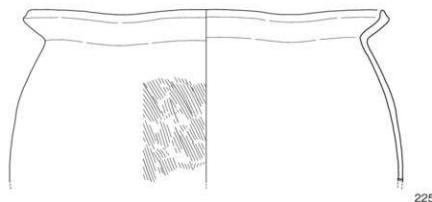
**施釉陶器** 232は鉢皿。見込みに格子状の卸口を刻み、木灰を原料とする灰釉をかける。底部は回転糸切り調整。釉調や類例より古瀬戸と思われる。233は皿か。底部の破片で、薄く鉄釉をかけ、一部に化粧土を塗る。見込みに目跡を残す。

**石器** 234・235は磨製石斧。いずれも基部の破片で刃部は残らない。石材は234が頁岩、235が蛇紋岩を用いる。

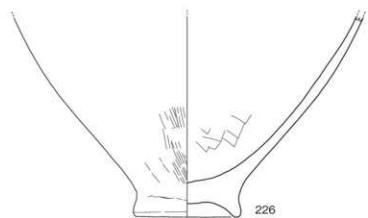
**石製品** 236は滑石製の温石。形状は残存部より長方形と想定される。1ヶ所に紐通し孔をもつ。  
**青銅製品** 237は鍔先の破片か。鍔が進行し表面が剥離する。帰属時期は不明。



224



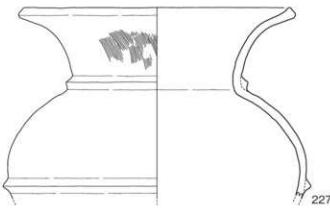
225



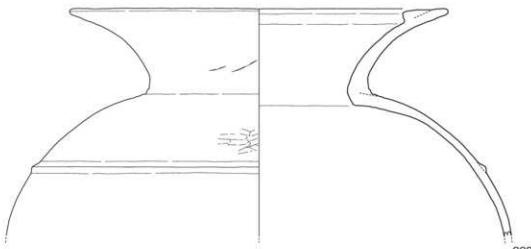
226

0 10cm

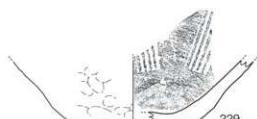
第69図 表面採集遺物 (1) (1/3)



227



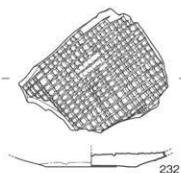
228



229



230



231



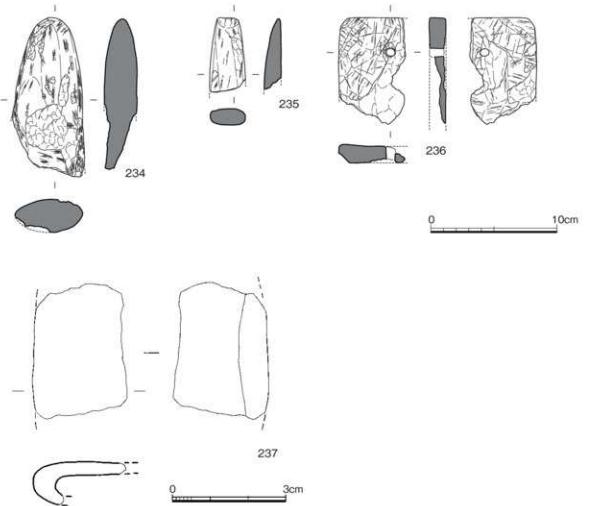
232

0 10cm

第70図 表面採集遺物 (2) (1/3)

(11) 遺物観察表

第1表 大谷田淵遺跡出土遺物観察表



第71図 表面採集遺物（3）(1/1 · 1/3)





## 第4章 おわりに

大谷田淵遺跡の遺構と遺物から得られた知見をいくつか記述し本書のまとめとしたい。

弥生時代では、溝、土坑、包含層などより板付II式期から後期の遺物が出土している。確認できた住居跡は軒のみで、集落の構造は不明確であるが、これまで弥生時代の様相が不明瞭であったこの地域に、下神田遺跡と時を同じくして集落が営まれ始めたことが明らかになった。また表遺物のなかに青銅製の鋤先と推定されるものがあり、この地の弥生集落に金属製の農具が導入されていたことが窺える。本遺跡に近い馬ヶ岳山麓や天生田大将陣から出土したと伝わる広形鋏子、広形銅戈とともに、この一帯に有力な弥生集落の存在を予見させる資料である。

古墳時代には前期の住居跡が1軒確認され、弥生時代からの継続性が認められるが、その後の住居は確認されず、これ以降の遺物も少ない。

空白の時代を経て、再びこの地に人々の營みが認められるのは中世からである。この時代の遺構には井戸9基、堅穴建物1軒、地下式土壙1基のほか、中世遺物をともなう土坑7基がある。2号、3号掘立柱建物も遺物は確認できなかったが中世の所産であろうか。遺跡全城から出土する遺物の時期は、12世紀中頃から16世紀半ばにわたる。

建物の時期や配置などが十分把握できなかったので、集落景観の復原は困難であるが、井戸や土坑の存在から当時の居住空間がこの一帯に広がっていたことは間違いない。その範囲は調査区西側の高台からやや東側の条里水田との界線あたりまで広がりそうである。また井戸から出土した石塔類から居住地に近接して墓地が営まれていたこともわかる。

大型の堅穴建物はその用途は不明だが、ここから出土した龍泉窯の双魚文壺や石製の硯は本遺跡が単なる農村集落ではないことを示している。五輪塔を主体とする石塔部材もこの地に居住した集団の階層を推測させる資料である。

これらの石塔部材は1号井戸から出土したもので、五輪塔の空軸輪2、水輪2、地輪1、一石五輪塔1の他、五輪塔の火輪を加工し、石臼に転用したものが一組出土した。墓塔の部材が礎石や石垣に転用された事例はしばしば目にすると、食に関わる日用品として再利用されているところに、激動的時代を生きた人々のたましさが感じられる。石塔類は種子を薬研砕した14世紀前半ごろの水輪(45)から16世紀ごろの一石五輪塔(47)まで時代幅があり、長期にわたり墓地が営まれていたことがわかる。その塔形から被葬者は武士階層と考えられ、本遺跡一帯に屋敷を構えた人々に關係する墓地と推察される。

出土遺物が示す12世紀中頃から16世紀後半にかけて、この地と繋がりをもつ有力武士層に天雨田氏と安東氏が存在する。いずれも天生田荘を支配した一族である。天雨田氏による支配の始まりははっきりしないが延慶3年(1310)から史料に現れ、元亨3年(1323)には姿を消している。その後は安東氏がこの地を永く支配していく。安東氏は得宗官として天生田荘の支配を開始し、その後、主を転々と換えながら、鎌倉幕府の滅亡、南北朝の動乱、室町、戦国時代を生き抜き17世紀中頃まで京都平野に勢力を保持した一族である。大谷田淵遺跡は現在、大字大谷に属するが、大字天生田との境界に位置し、当時はおそらく天生田荘の一部であったと考えられる。

さて、井戸から出土した石塔類が立ち並ぶ中世墓の姿が目に浮かぶ。さらにはこの

番号	高さ(m)	横幅	沿革	法尺(cm)	調査	地成	出土	負担	残存	備考
201	2.8	2.5	西御器 西御器	馬5.15	内：1脚軒+2脚柱+壁 外：1脚軒+2脚柱+壁	良好	面積～1.7mの白色 黒色相模を含む	内：高8.235V-3 外：高8.235V-1	廻田井	
202	2.5	2.5	瓦葺	馬5.16	内：1脚軒+2脚柱+壁 外：1脚軒+2脚柱+壁+ササ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：高8.36V-1	1.2残存	
203	2.5	2.5	瓦葺	馬5.17	内：1脚軒+2脚柱+壁 外：1脚軒+2脚柱+壁	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：高8.37V-1	2.0残存	
204	2.5	2.5	瓦葺	馬5.18	内：1脚軒+2脚柱+壁 外：1脚軒+2脚柱+壁	良好	面積～1.7mの白色 黒色相模を含む	内：高8.38V-1	1.2残存	
205	2.5	2.5	瓦葺	馬5.19	内：1脚軒+2脚柱+壁 外：1脚軒+2脚柱+壁	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M85V-1 外：M84V-1	日本定期	
206	2.5	2.5	瓦葺	馬5.20	内：オサキ	不良	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：高8.39V-1 外：高8.39V-1	廻田井	
207	2.5	2.5	瓦葺	馬5.21	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M87.35V-1 外：M87.35V-1	1.0廻田井	白船軒V-4型
208	2.5	2.5	瓦葺	馬5.22	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁+一輪	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：高8.37V-1 外：高8.37V-1	廻田井+東京 最古系	
209	2.5	2.5	瓦葺	馬5.23	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁+一輪	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M88.42V-1 外：M88.42V-1	廻田井+東京 最古系	
210	2.5	2.5	瓦葺	馬5.24	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁+一輪	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M89.47V-1 外：M89.47V-1	廻田井+東京 最古系	
211	2.5	2.5	瓦葺	馬5.25	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁+一輪	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M90.52V-1 外：M90.52V-1	廻田井+東京 最古系	
212	2.5	2.5	瓦葺	馬5.26	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁+一輪	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M91.57V-1 外：M91.57V-1	廻田井+東京 最古系	
213	2.5	2.5	瓦葺	馬5.27	内：ロクナタ+2脚柱+壁 外：ロクナタ+2脚柱+壁	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M92.62V-1 外：M92.62V-1	廻田井+東京 最古系	
214	2.5	2.5	石造	馬5.28	内：ロクナタ+2脚柱+壁	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M93.67V-1 外：M93.67V-1	廻田井	
215	2.5	2.5	堅穴建物	馬5.29	内：ロクナタ+2脚柱+壁	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M94.72V-1 外：M94.72V-1	廻田井+廻田井	
216	2.5	2.5	廻田井	馬5.30	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M95.77V-1 外：M95.77V-1	廻田井	
217	2.5	2.5	廻田井	馬5.31	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M96.82V-1 外：M96.82V-1	廻田井+一輪 排水井	
218	2.5	2.5	廻田井	馬5.32	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M97.87V-1 外：M97.87V-1	廻田井+廻田井 排水井	
219	2.5	2.5	廻田井	馬5.33	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M98.92V-1 外：M98.92V-1	廻田井	
220	2.5	2.5	廻田井	馬5.34	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M99.97V-1 外：M99.97V-1	廻田井	
221	2.5	2.5	土器	馬5.35	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M100.10V-1 外：M100.10V-1	廻田井	
222	2.5	2.5	瓦葺	馬5.36	—	—	—	—	有井井	堅穴
223	2.5	2.5	瓦葺	馬5.37	—	—	—	—	—	堅穴
224	2.5	2.5	瓦葺	馬5.38	—	—	—	—	—	堅穴
225	2.5	2.5	堅穴建物	馬5.39	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M101.10V-1 外：M101.10V-1	廻田井	
226	2.5	2.5	廻田井	馬5.40	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M102.15V-1 外：M102.15V-1	廻田井	
227	2.5	2.5	廻田井	馬5.41	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M103.20V-1 外：M103.20V-1	廻田井	
228	2.5	2.5	廻田井	馬5.42	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M104.25V-1 外：M104.25V-1	廻田井	
229	2.5	2.5	廻田井	馬5.43	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M105.30V-1 外：M105.30V-1	廻田井	
230	2.5	2.5	瓦葺	馬5.44	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M106.35V-1 外：M106.35V-1	廻田井	
231	2.5	2.5	廻田井	馬5.45	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M107.40V-1 外：M107.40V-1	廻田井	
232	2.5	2.5	廻田井	馬5.46	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M108.45V-1 外：M108.45V-1	廻田井	
233	2.5	2.5	廻田井	馬5.47	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M109.50V-1 外：M109.50V-1	廻田井	
234	2.5	2.5	廻田井	馬5.48	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M110.55V-1 外：M110.55V-1	廻田井	
235	2.5	2.5	廻田井	馬5.49	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M111.60V-1 外：M111.60V-1	廻田井	
236	2.5	2.5	廻田井	馬5.50	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M112.65V-1 外：M112.65V-1	廻田井	
237	2.5	2.5	廻田井	馬5.51	内：ヨコヨリ	良好	面積～2.0mの白色 黒色相模を含む	内：M113.70V-1 外：M113.70V-1	廻田井	
238	2.5	2.5	廻田井	馬5.52	—	—	—	—	—	堅穴
239	2.5	2.5	廻田井	馬5.53	—	—	—	—	—	堅穴
240	2.5	2.5	廻田井	馬5.54	—	—	—	—	—	堅穴
241	2.5	2.5	廻田井	馬5.55	—	—	—	—	—	堅穴
242	2.5	2.5	廻田井	馬5.56	—	—	—	—	—	堅穴
243	2.5	2.5	廻田井	馬5.57	—	—	—	—	—	堅穴
244	2.5	2.5	廻田井	馬5.58	—	—	—	—	—	堅穴
245	2.5	2.5	廻田井	馬5.59	—	—	—	—	—	堅穴
246	2.5	2.5	廻田井	馬5.60	—	—	—	—	—	堅穴
247	2.5	2.5	廻田井	馬5.61	—	—	—	—	—	堅穴
248	2.5	2.5	廻田井	馬5.62	—	—	—	—	—	堅穴
249	2.5	2.5	廻田井	馬5.63	—	—	—	—	—	堅穴
250	2.5	2.5	廻田井	馬5.64	—	—	—	—	—	堅穴
251	2.5	2.5	廻田井	馬5.65	—	—	—	—	—	堅穴
252	2.5	2.5	廻田井	馬5.66	—	—	—	—	—	堅穴
253	2.5	2.5	廻田井	馬5.67	—	—	—	—	—	堅穴
254	2.5	2.5	廻田井	馬5.68	—	—	—	—	—	堅穴
255	2.5	2.5	廻田井	馬5.69	—	—	—	—	—	堅穴
256	2.5	2.5	廻田井	馬5.70	—	—	—	—	—	堅穴
257	2.5	2.5	廻田井	馬5.71	—	—	—	—	—	堅穴
258	2.5	2.5	廻田井	馬5.72	—	—	—	—	—	堅穴
259	2.5	2.5	廻田井	馬5.73	—	—	—	—	—	堅穴
260	2.5	2.5	廻田井	馬5.74	—	—	—	—	—	堅穴
261	2.5	2.5	廻田井	馬5.75	—	—	—	—	—	堅穴
262	2.5	2.5	廻田井	馬5.76	—	—	—	—	—	堅穴
263	2.5	2.5	廻田井	馬5.77	—	—	—	—	—	堅穴
264	2.5	2.5	廻田井	馬5.78	—	—	—	—	—	堅穴
265	2.5	2.5	廻田井	馬5.79	—	—	—	—	—	堅穴
266	2.5	2.5	廻田井	馬5.80	—	—	—	—	—	堅穴
267	2.5	2.5	廻田井	馬5.81	—	—	—	—	—	堅穴
268	2.5	2.5	廻田井	馬5.82	—	—	—	—	—	堅穴
269	2.5	2.5	廻田井	馬5.83	—	—	—	—	—	堅穴
270	2.5	2.5	廻田井	馬5.84	—	—	—	—	—	堅穴
271	2.5	2.5	廻田井	馬5.85	—	—	—	—	—	堅穴
272	2.5	2.5	廻田井	馬5.86	—	—	—	—	—	堅穴
273	2.5	2.5	廻田井	馬5.87	—	—	—	—	—	堅穴
274	2.5	2.5	廻田井	馬5.88	—	—	—	—	—	堅穴
275	2.5	2.5	廻田井	馬5.89	—	—	—	—	—	堅穴
276	2.5	2.5	廻田井	馬5.90	—	—	—	—	—	堅穴
277	2.5	2.5	廻田井	馬5.91	—	—	—	—	—	堅穴
278	2.5	2.5	廻田井	馬5.92	—	—	—	—	—	堅穴
279	2.5	2.5	廻田井	馬5.93	—	—	—	—	—	堅穴
280	2.5	2.5	廻田井	馬5.94	—	—	—	—	—	堅穴
281	2.5	2.5	廻田井	馬5.95	—	—	—	—	—	堅穴
282	2.5	2.5	廻田井	馬5.96	—	—	—	—	—	堅穴
283	2.5	2.5	廻田井	馬5.97	—	—	—	—	—	堅穴
284	2.5	2.5	廻田井	馬5.98	—	—	—	—	—	堅穴
285	2.5	2.5	廻田井	馬5.99	—	—	—	—	—	堅穴
286	2.5	2.5	廻田井	馬6.00	—	—	—	—	—	堅穴
287	2.5	2.5	廻田井	馬6.01	—	—	—	—	—	堅穴
288	2.5	2.5	廻田井	馬6.02	—	—	—	—	—	堅穴
289	2.5	2.5	廻田井	馬6.03	—	—	—	—	—	堅穴
290	2.5	2.5	廻田井	馬6.04	—	—	—	—	—	堅穴
291	2.5	2.5	廻田井	馬6.05	—	—	—	—	—	堅穴
292	2.5	2.5	廻田井	馬6.06	—	—	—	—	—	堅穴
293	2.5	2.5	廻田井	馬6.07	—	—	—	—	—	堅穴
294	2.5	2.5	廻田井	馬6.08	—	—	—	—	—	堅穴
295	2.5	2.5	廻田井	馬6.09	—	—	—	—	—	堅穴
296	2.5	2.5	廻田井	馬6.10	—	—	—	—	—	堅穴
297	2.5	2.5	廻田井	馬6.11	—	—	—	—	—	堅穴
298	2.5	2.5	廻田井	馬6.12	—	—	—	—	—	堅穴
299	2.5	2.5	廻田井	馬6.13	—	—	—	—	—	堅穴
300	2.5	2.5	廻田井	馬6.14	—	—	—	—	—	堅穴
301	2.5	2.5	廻田井	馬6.15	—	—	—	—	—	堅穴
302	2.5	2.5	廻田井	馬6.16	—	—	—	—	—	堅穴
303	2.5	2.5	廻田井	馬6.17	—	—	—	—	—	堅穴
304	2.5	2.5	廻田井	馬6.18	—					

墓地には塔高1m前後の五輪塔が少なくとも3基以上存在していたことがわかる。こうした墓地景観と石塔の年代観からこの墓地に葬られたのは安東氏の一族である可能性が高い。

ではこの墓地の祭祀が途絶え、石塔が転用あるいは投棄された経緯は何に求められるのであろうか。史料によると安東氏は約300年余の長きにわたり、ほぼ一貫して天生田荘を掌握していたようだが、永禄3年（1570）年から一時期、天生田荘は大友氏の有力武将、奈多鑑基の所領となったことがある。安東氏はこの時、近隣に展開する自領のどこかに墓地や莊園經營の拠点を移したことが考えられる。天生田荘の墓地に残された石塔類は、新たな領主によって整理され石臼への転用や、井戸への投棄が行われたのであろう。ただし石臼の投入はこれが井戸の中位に並べて置かれていたことから、祭祀行為であるかもしれない。

安東氏は再び天生田荘を領有するが、その後、細川忠興の家臣となり、寛永20年（1643）に細川氏とともに肥後熊本へと移っていった。

中世の天生田荘を景観復原し、天雨田氏や安東氏の莊園經營の拠点を明らかにするには、さらにこの地域の総合的な調査が必要であるが、大谷田淵遺跡から出土したさまざまな資料は、本遺跡周辺もその候補地の一つであることを示すものといえる。

最後に本書を成すにあたりご指導、ご協力いただいた多くの方々に心よりお礼申し上げます。

### 天生田荘関係略年譜

- 延慶3年（1310）田川郡赤莊地頃因幡彦鶴丸と天雨田恵行が所領をめぐり相論する。  
元応2年（1320）天雨田行政、天雨田荘公文職および武松名を安東鶴益丸に譲与する。  
元亨3年（1323）安東鶴益丸への譲与の有効性が安東助泰によって確認される。  
暦応2年（1339）一色道猷、天生田荘以下5ヶ所の所領を給与される。  
康暦2年（1380）安東助阿、大内義弘から天生田荘公文職を安堵される。  
文亀元年（1501）大内勢と大友勢、少弐勢が馬ヶ岳周辺で衝突する。  
天文21年（1552）安東氏、大内義長に属して天生田荘はかの安堵を得る。  
永禄7年（1564）安東増俊、大友宗麟（義鎮）より式部少輔任官を認められる。  
永禄13年（1570）安東氏、大友氏より大野井・長江・寺畔・二塚・久保の知行を認められるが、天生田荘は奈多鑑基の所領となる。  
天正6年（1578）耳川の戦いで安東増俊戦死。安東氏、大友から毛利方に転じる。  
天正10年（1582）安東氏、高橋元種に従い長江・大野井・天生田・寺畔・二塚・久保を安堵さる。  
慶長14年（1609）安東五介、細川忠興に仕え、草場村・下原村で300石の知行を給付される。  
寛永20年（1643）細川氏の肥後熊本へ転封にともない家臣である安東氏も肥後へ移る。

### 参考文献

- 服部英雄、井上聰、中村修身ほか「第三編 中世」『行橋市史』中巻 2006年  
宇野隆夫『莊園の考古学』 2001年

# 図 版



大谷田淵遺跡周辺 米軍撮影空中写真  
(1947年12月15日撮影 写真名 USA-M690-27 国土地理院発行を転載)



1. 遺跡遠景（東から）



2. 遺跡全景（東上空から）



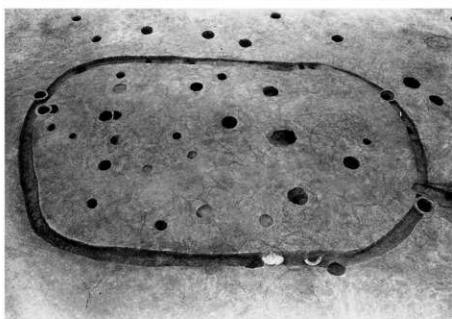
1. 遺跡北側



2. 遺跡南側



1. 1号堅穴住居跡



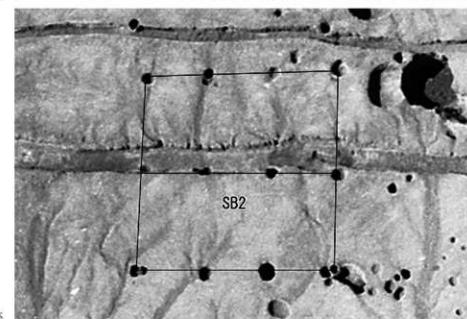
2. 2号堅穴住居跡



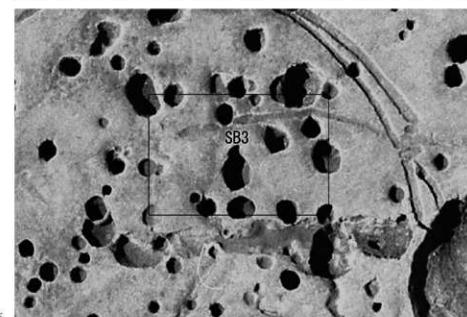
3. 3号堅穴住居跡



1. 1号掘立柱建物跡



2. 2号掘立柱建物跡



3. 3号掘立柱建物跡



1. 壺穴建物跡（上空から）



2. 壺穴建物跡遺物出土状況



3. 壺穴建物跡（南から）



1. 壺穴建物跡出土状況



2. 壺穴建物跡土器出土状況

3. 壺穴建物跡  
双魚文青磁環出土状況



1. 1号井戸跡

2. 1号井戸跡  
五輪塔出土状況3. 1号井戸跡  
石臼出土状況

1. 2号井戸跡（西から）



2. 2号井戸跡（南から）



3. 2号井戸跡（北から）



1. 2号井戸跡  
井筒検出状況



2. 2号井戸跡  
井筒検出状況



3. 2号井戸跡  
下部出土状況



1. 3号井戸跡



2. 4号井戸跡



3. 6号井戸跡



1. 6号井戸跡  
曲物出土状況



2. 7号井戸跡



3. 8号井戸跡



1. 3号溝跡（左）と4号溝跡（右）



3. 10号溝跡

2. 3号溝跡遺物出土状況



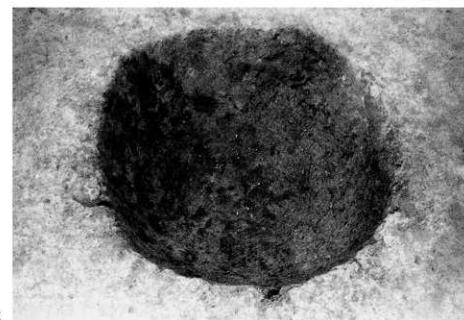
1. 11号溝跡と19号土坑



2. 12号溝跡遺物出土状況



3. 4号土坑



1. 5号土坑



2. 8号土坑



3. 10号土坑



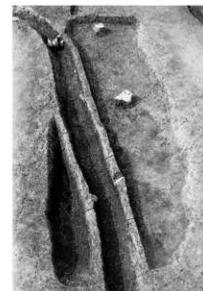
1. 11号（左）12号（右）土坑



2. 15号土坑



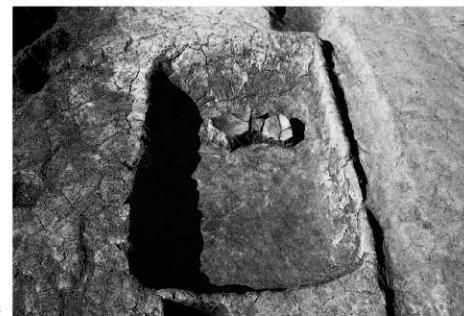
3. 19号土坑



1. 20号土坑



2. 22号土坑



3. 23号土坑



4. 地下式土壙

図版 18



1. 青銅製剣先出土状況

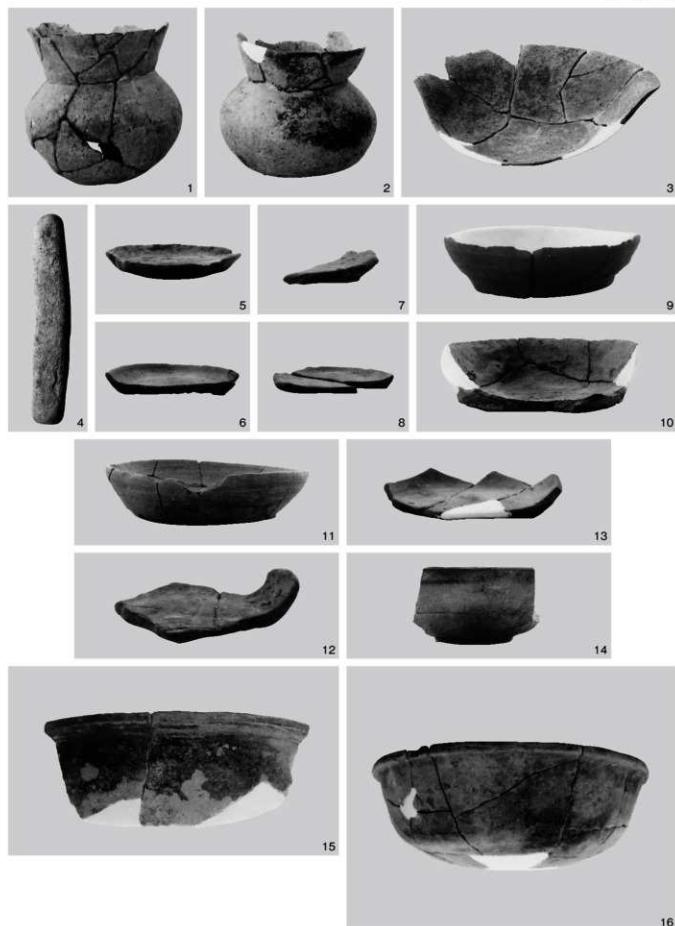


2. 道溝検出状況

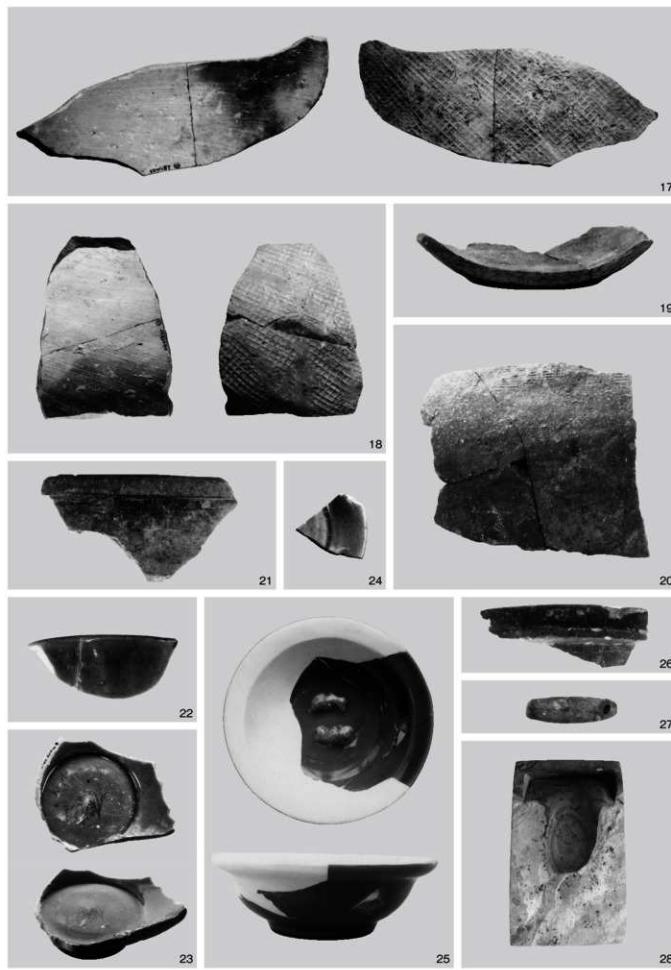


3. 発掘調査風景

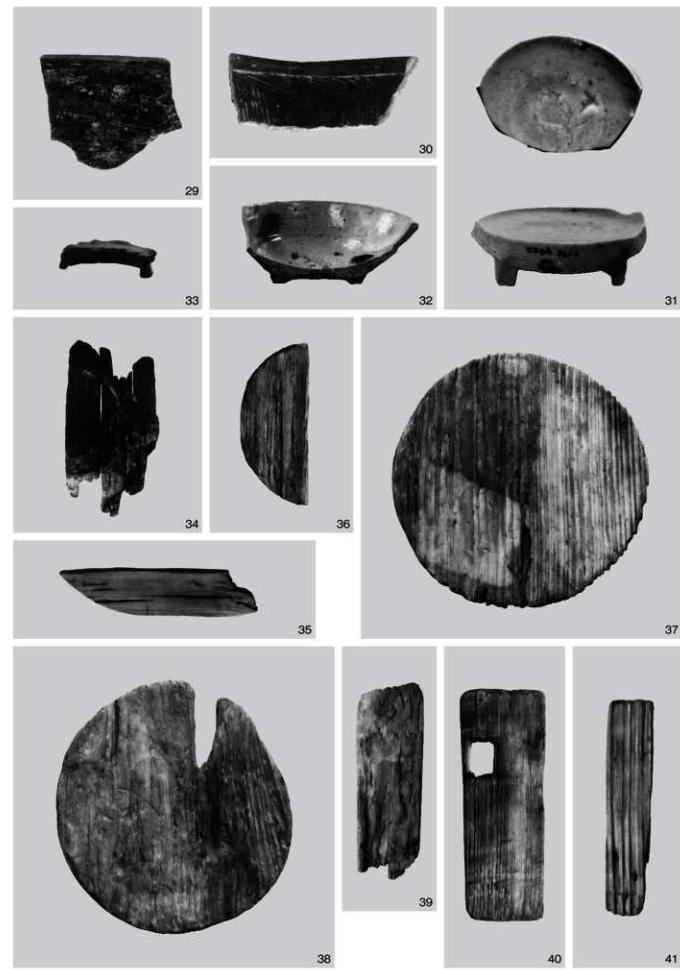
図版 19



出土遺物（1）

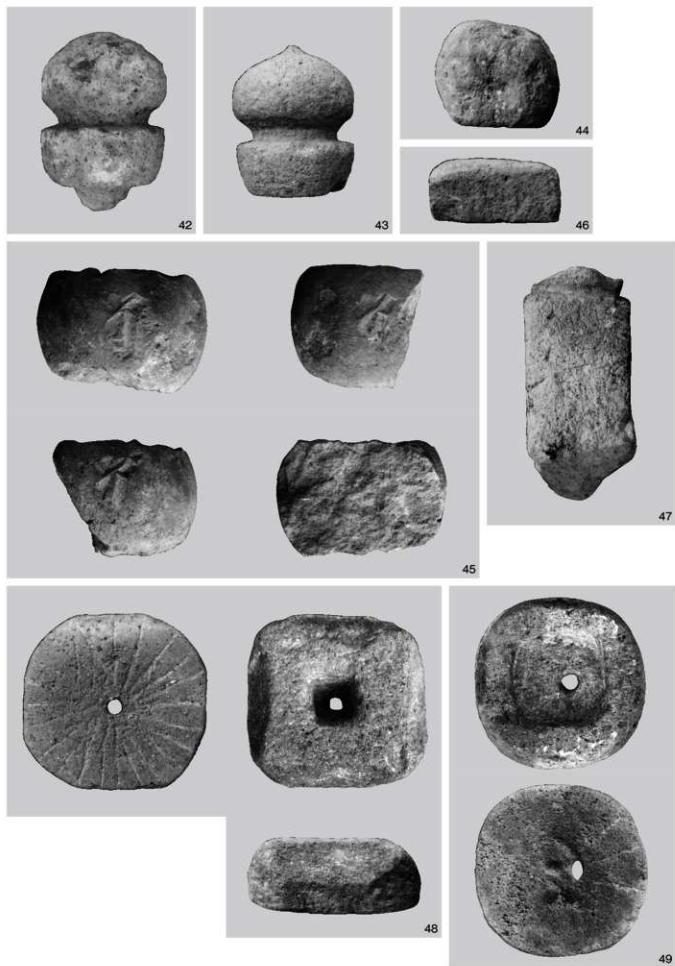


出土遺物（2）



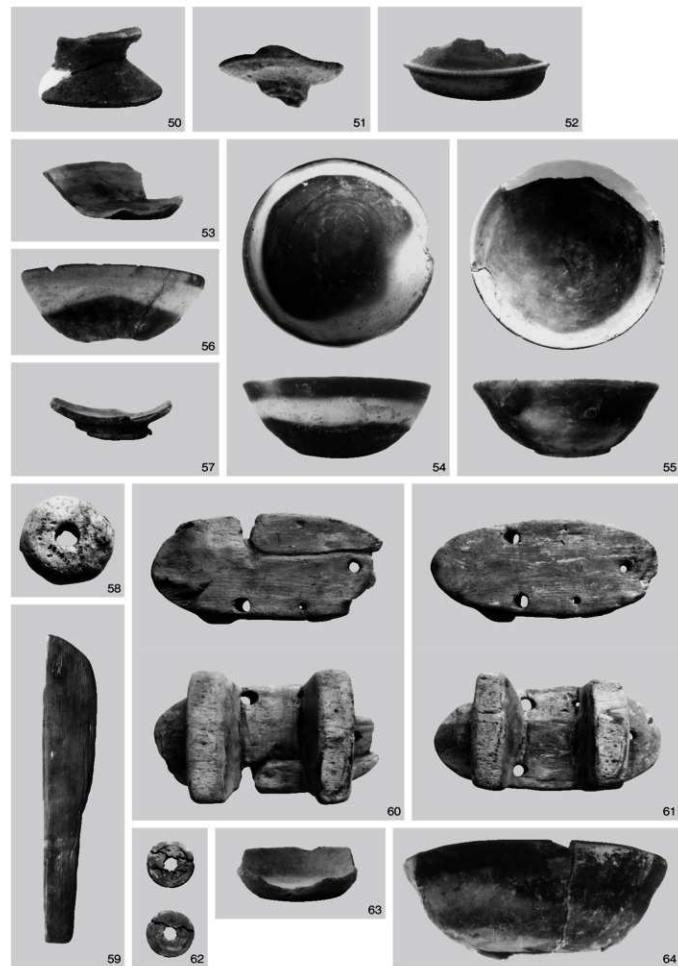
出土遺物（3）

図版 22



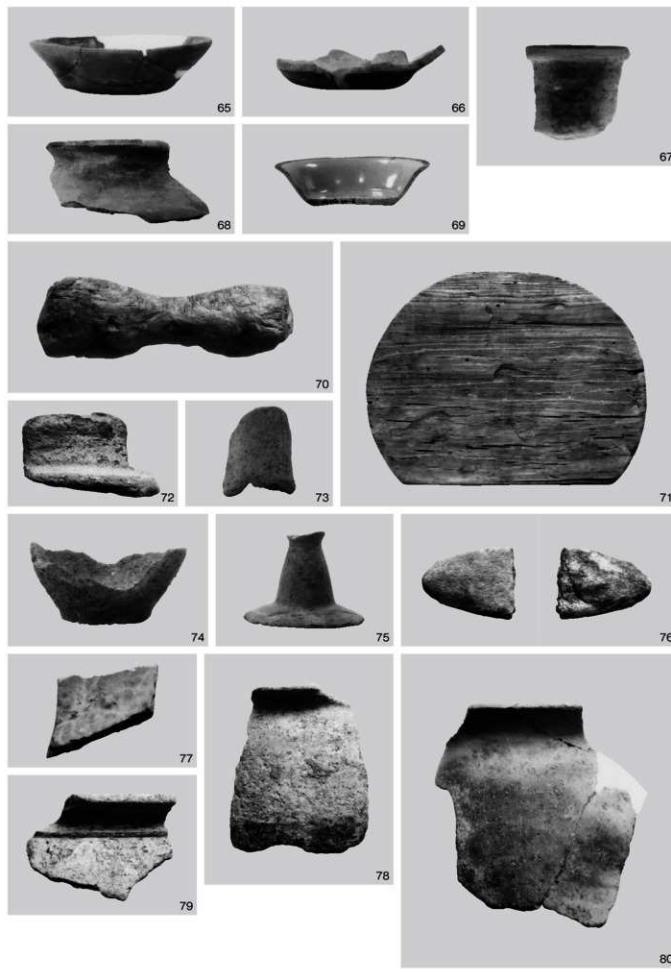
出土物 (4)

図版 23



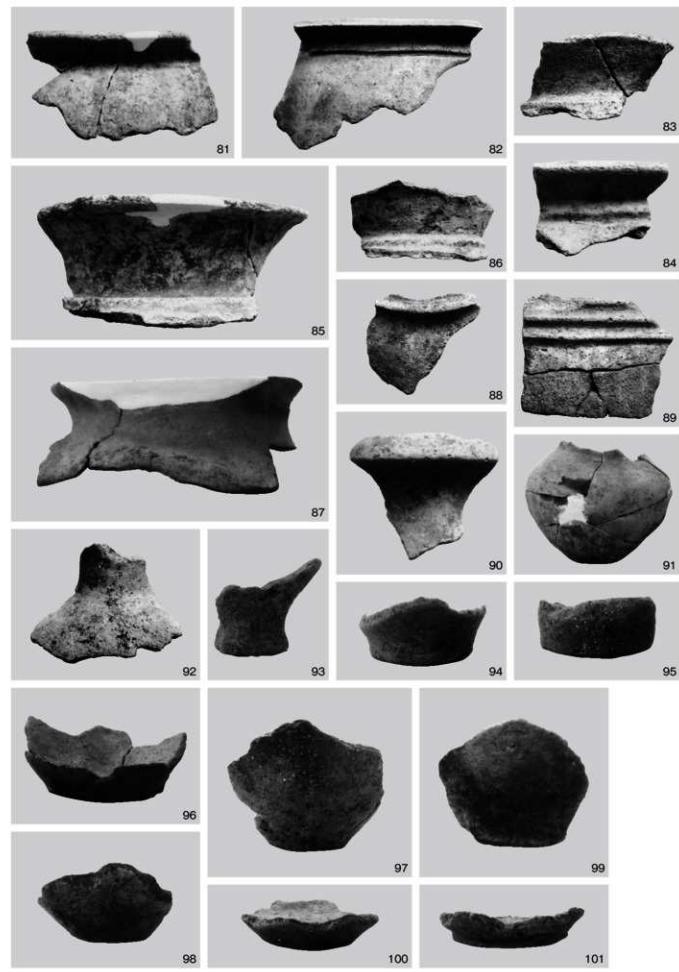
出土物 (5)

図版 24



出土遺物（6）

図版 25



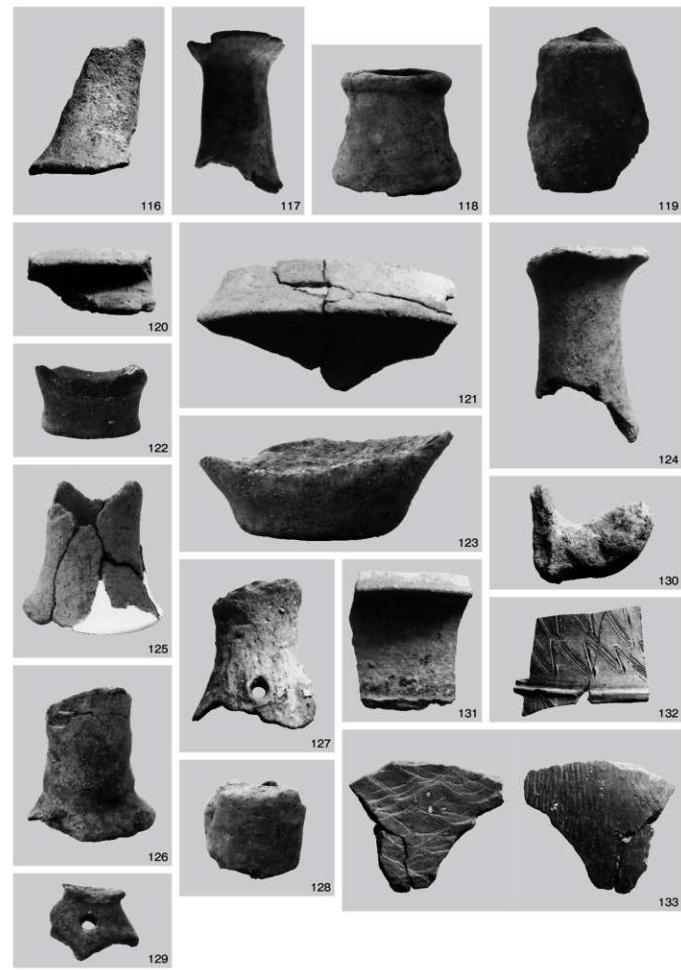
出土遺物（7）

図版 26



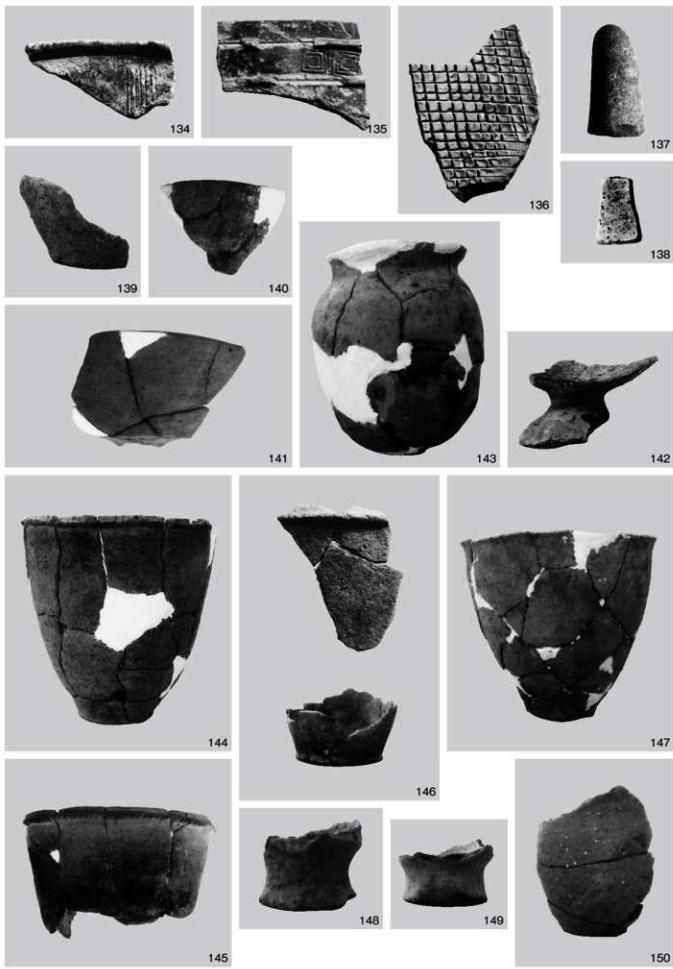
出土遺物（8）

図版 27



出土遺物（9）

図版 28



出土遺物 (10)

図版 29



出土遺物 (11)

図版 30



出土遺物 (12)

図版 31



出土遺物 (13)

図版 32



出土遺物 (14)

図版 33



出土遺物 (15)

# 報告書抄録

ふりがな	おおたに た みち いせき						
書名	大谷田淵遺跡						
副書名	福岡県行橋市大字大谷所在遺跡の調査						
巻次							
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第36集						
編著者名	小川秀樹・山口裕平						
編集機関	行橋市教育委員会						
所在地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号						
発行年月日	2010年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
おおたに た みち いせき 大谷田淵遺跡	ふくおかけんゆくほし 福岡県行橋市 おおたに 大字大谷	402133 14105005	33° 41° 30°	130° 17° 15°	19950525 ? 19951014	3,000m <sup>2</sup>	は場 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
おおたに た みち いせき 大谷田淵遺跡	集落	弥生 古墳 中世	竪穴住居 掘立柱建物 井戸 溝 土坑 地下式土壙	弥生土器 須恵器 土師器 瓦器 陶磁器 石器 石臼 五輪塔部材 硯 青銅製鋒先 木製品 下駄			

## 大谷田淵遺跡

行橋市文化財調査報告書第36号  
2010年3月12日

発行 行橋市教育委員会  
福岡県行橋市中央一丁目1番1号

印刷 有限会社田中印刷所  
福岡県行橋市行事四丁目19番13号

# OHTANITABUCHI SITE

Excavation Report of

the Ohtanitabuchi Site

in Yukuhashi Fukuoka Prefecture

March 2010

THE BOARD OF EDUCATION OF YUKUHASHI CITY